特にこれといった目的もない異世界転生

zaq2

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不幸な自損事故によって亡くなった主人公は、女神様やら何やら、そういったモノたちとは出会う事もなく、魔境の森とよばれる深淵の森に隣接する辺境農村の末っ子に生まれ変わる。

そんな田舎ともいえる農村でぬくぬくと、よくある”異世界あるある”の知識を使って回りを巻き込んで育っていったが、家に居辛くなったため、成人を迎えた日に実家を出ていく事にした。

とくに、これといった目的も持たないままに――――

目次

0：旅立ち
#0：とりあえず、生き延びよう。 1
#1：生き延びた証 6
#2：いか○たふぁみりーという名の自己紹介 13
#3：さあ、旅立ちの時 19
#4：旅だった、弾け飛んだ 25
#Ⅰ：神様って、いると信じてる？（上） 31
#Ⅱ：神様って、いると信じてる？（下） 37
1：カミを祭る国
#壱：初めての耳 43
#弐：マホーショージョ、怖っ 47
#参：異世界の車窓から 53
#イ：もう、終わってもいいよね…… 60
#肆：ふぅ…… 66
#伍：ここは、地獄でもなければ 72
#ロ：”翼持ち”というのは…… 80
#陸：D．I．O． 86
#ハ：チカラ 91
#漆：ムーヴ 95
#捌：E？u＋l，io＊―． 100
#ニ：実家からの手紙 106
#玖：天の裁き 113
#ホ：【喋るな】 120
#拾：oh，jesus… 125

0：旅立ち

#0：とりあえず、生き延びよう。

――この世界には、勇者と魔王がいる。

選ばれた勇者が、唯一無二、魔王に対抗できる存在であり、
その勇者の力を使って、世界を闇に包んでくる魔王の企みを阻止していた。

過去、幾度となくその様な戦いが行われた。
ある年代では、魔王が勝利を勝ち取り、大陸全土を支配下に陥れ、
尊厳や人権を無視した扱いで酷使されつづけた年代もあった。
一方で、勇者が現れて、その苦しみから解放し、
自分たちの土地を取り戻し、そして魔王率いる土地までも……

魔王が勝ち、勇者が勝ち、と、その歴史を紐解いてみてみれば、
その様な事が繰り返し、続いていた……

勇者は、召喚される物でもなく一族的な血の盟約により受け継がれる。
魔王も同じく、血を継承する事により受け継がれる存在である。

そんな、勇者と魔王が登場する物語のような世界に――

自分という意思が放り込まれたわけである。
いうなれば転生した様で、転生者（そういう）存在として自分が生まれた訳である。

なお、前世の死因は女神運送（トラック）でもなく、過労商社（ブラック）でもなく、ただ単

に不幸な事故……のはず？

不幸な事故としているのは、一応はその時の記憶があったからである。

その記憶というと、それは、新しいトレーニングウェアを手に入れて、ハッスルマッスルとトレーニングに勤しもうとした時の事だ。

『いいか？大腿二頭筋、半膜様筋、半腱様筋が一番大事だ！基本というのは、ほぼここできまる！』

という教えの元、下半身を重点的に筋トレしまくっていた。

それまでにも、剣術、柔術、合気術、抜刀術、棒術、杖術、色々と師事を仰いで教わっていたが、そのそれぞれに共通する点として、下半身と軸と重心が重要という教えを受けて、真面目に取り組んで”皆伝”や”師範”まで頂いた。

おまけとしては、暴漢や悪漢を取り押さえては、表彰も頂いたぐらいだ。

だが、昨今の流行り病に罹患する。

”そんな病に負けるわけにはいかん！病には体力！つまりは筋肉が足りないからだ”！と思い違いをし、罹患した状態でトレーニングへと赴いた。

病は気からとも、気力で負けてしまってはいけないと思ったわけだ。

ただ、冬場の野外階段の下りダッシュはアカンかった。

前日に雨が降ってたらしく、凍った段差に脚を滑らせる。

いつもの身体の状態ならば、それすらもリカバリーできているはずが、さすがパンデミック級。

受け身を取ろうという行動が、変な頭痛によっては遅れ、そのままストーンと頭部を強打して逝った模様である。
最後「うぉぁ?!」と言っていたのが記憶には残っている。

享年６×歳。
定年退職しては、第二の人生スタートしてしばらくたっていたのにな。
両親は介護の末に他界し、姉弟がそれぞれの家庭を築いて遠くに住んでいるだけである。
身近では、趣味（筋トレ兼オタク）仲間の友人に、申し訳なかったなぁとは思う。
そんな自分の生涯は、童貞を貫いたとだけ伝えておこう。

研究職の職員につぐ！
仕事に没頭し続けてたらそうなるからな！
ほどほどにしとけよ？先人からのアドバイスだ！

そうして、新たに生を受けて、生まれ落ちた世界。
この世界での最初の記憶は赤ん坊という事で、何てマニアックなプレイをさせられているのだろうかと思ったぐらいである。
ただ、それ以上に、やはり存在した『魔力』というモノ。
あれだね、”異世界あるある”の定番といえるヤツがあったわけだね。
前世では魔法使いにはなれなかったが、どうやら今世では魔法使いになれる様であ る。

もうね、ミルク（直飲み）を忘れるぐらいにソイツをどうこうしようと四苦八苦したよ。
研究職だった血が騒いだのか、いろんなパティーンを試しては記憶し、また試してはと繰り返した。
なにしろ、赤ん坊の時に、筋トレなんぞ出来る訳でもなく、暇をもてあそび過ぎていたからね。仕方ないね。
ついでに付け加えれば、寝る間も惜しんでさらに没頭しちゃった訳だ。
魔力という存在をどうにかこうにか扱ってやろうと。
ただ、それが悪かった。
現・母親に、寝ない・飲まないで、病気じゃないかとすごく心配されまくった。

正直、スマンカッタ。反省してます……

その後はちゃんと反省していたので、睡眠時間は有る程度（超熟睡で2～3時間）とりますしミルク（直飲み）はがっつり頂きます。
赤ちゃんプレイと言わない様に、その時の羞恥心は研究心でかなぐりすてるので必死だったのだから……（死んだ目
そして、ある程度のコツがわかってきてからは反復練習と運用練習と応用練習。
果ては、前世の知識の”異世界あるある”適な流用や、何かしらの使い道がないかを、暇な時間にみっちりと行っていったわけである。

ただ、どういうわけか、そんな制御の練習時に限って兄者1と兄者2が様子を見に来ては、自分の顔をペシペシ叩きに来よる。
どうみても、面倒見というか、玩具にしにきてるじゃねーか。
丹田法による魔力循環かつ身体強化を試してる時にそれやるのやめろや。
あ、集中きれちまった……くそう、秘儀「大泣き」を披露してやったぜ！

ハハハハハ！大慌てしよるわ！コヤツらめ！

ま、そんなこんなで乳児期に幼少期と、よくある異世界ならば、命の価値も安かろう悪かろうにならないよう、簡単にポックリ行かないようにしなければならない。

こういう異世界あるあるならば、衛生観念もさることながら、前世以上に鍛えて、今度こそは、病にも負けねぇ身体を作らなければ……

#1：生き延びた証

はい、末っ子の”ラーマ”です。

もう10年もたちましたが、乳児時代は過ぎ去るのは速いというけれども、あっというまです。

そして、村の風習なのか世界の常識なのか、16歳となった上の兄者は成人を迎える年になります。

16歳で成人が早いと思ったりもしましたが、命が軽い世界だと、そうせざるをえないというか……？そういう感じなのと割り切っております。

あと、成人を迎える日に、おとなりさんの娘さんと結婚しそうでもあります。

なお、下の兄者は魔法オタクになっており、幼馴染にあたる村娘の姉御に、ほぼ毎日”外に出よう”と無理矢理連れ出されております。

お隣さんと幼馴染は、敗北者ではなかったのか……

このリア充たちめ……爆発しろ。

こちとらそういう存在（おさなじみ、おとなりさん）がおらんのやぞ？

再度言うが、やっぱ爆発しろ？

それはさておき、筋力トレーニングがようやく行えては確立し、魔力（？）トレーニングもオリジナルでしっかりと鍛え上げておりました。

前世における研究者の職業病と、真面目に勤め上げた筋トレの経験と、サブカルオタクの知識は伊達ではないのだ、伊達では!!

冷静に考えたら、やべー組合せだなと思ったのはかなぐり捨てます。

それよりも、我が家の農作物収穫量は、村の中にて最強。フゥハハ

ハハハハ！

まぁ、よくある、知識チートという奴ですね。
というか、この土地の農作物の収穫量がてんでふるわなかったので、農地改善のためにこっそりと肥料やら土壌改善をしたりした。
なにせ、栄養不足は病につながる。つまり、健康に対して悪い要素でもあるからだ。
それらを改善するべく、４年ぐらい前から色々と動き出した。
特に、畑に撒いてる水に塩分が微妙に入っているっぽく、水の元凶を探れば、原因は魔境にあった岩塩という嫌らしい存在であったので、それらを強引（物理）に取り除いては石灰まぜたりで問題対策やらをしたりと前世様の知識を元に、農業改革をしまくった訳であります。

まぁ、お隣さんたちというか、村全体にも同じ方法をコッソリと導入して、昨年からあっちこっちで豊作しまくってるんですけどね。
というか、この世界の農作物たち、こっちが手を加えれば加えるほど、はんぱなくヤル気に満ちていってる気がしないでもないぐらいにタフネスに育ちやがりました。

そして、なんでも領内トップの収穫量で、新記録の更新らしいです。やったぜ！

そうそう、一応、そういう知識チートのお試し様に、実験用の隠し農地は隠してあります。
前世と同じ知識でやれるかはわからないので、いきなりやって大問題が起きることが無い様に実験は大事なのですよ。
えっ？その隠し農地の納税義務とかは？って？
見つからなければ、納税の対象ではないのだよ。ハハハハッハ！
というか、見つかりっこもないけれどもね。
なにせ、ここから普通にいけば数週間以上いった”魔境”の奥にあ

ります。
そして、やってる事が結構ヤバイです。品種改良とかそういうのだし？この世界において、それらが良い事なのか悪い事なのかもわかりませんからね。

そうそう、その農地改革によって、あまりにもの大豊作を記録した事に、貴族様の目に留まっては増税されかねない、という危機が迫ったこともあった。
そりゃぁ、例年以上の農作物の納品なんてしてしまえば、原因調査なんぞにいろいろと詮索されたりする。
そうなると、自分ちどころか村全体が、増税対象でヤバイかもですと。
その為、隠れ蓑にするためにと、こういう時は『”豊穣の神様の威光が起きた”とか何とか言って、宗教に全投げすればよいのです』案を決行。
村にある集会所みたいな教会の女神像を、コッソリと”えいっえいっふんっ！”と魔力（？）かつ、ちょっと汚すぎなので丹精込めて綺麗になれ～美人さんになれ～という念と、やってる事バレるなー作った作物これ以上もっていくな～という（邪）念を交えては、ご立派に磨き倒して光り輝かせておきました。

そうすればね、本当にそういう方向におさまっちゃいましたからね。
宗教の人たちが本当に来たのにはビックリしたけど、そういう認定書おいてったよ……

えーっと、チョロすぎんよ、異世界さん……いいのか？それで。

ま、そんなこんながありましたが、今現在は試作のトンボゴロシ……もとい、その改良品種のトウモロコシ（？）もどきの爆裂種を、魔力（？）でこう「えい、えい、ヌンッ!!」と微調整したものを作付し

た結果の調査です。
これがうまくいけば、今期には新たな村の特産品としてポップコーンが出来るはず。

まぁ、本当に作れる品種になるかどうかは、育てて見なければわっかりませんからね。

なお、隠し畑の魔境産実験”拾参”号は、魔力（？）の込み方がヤバかったのか、それとも、土地が悪かったのか、食うか食われるかの食肉植物と化し、最後は自爆してましたが。（かしこ

さて、そんな試行錯誤をした結果の調査をしながらの農作業をしていると

「なーなー、あそぼーぜー！」
「前みたいな、面白い遊びを事おしえてくれよー」
「いまは仕事中。邪魔邪魔。あっちいけ、シッシッ」
「えー！いーじゃーん！いつもならサボって遊んでくれてんじゃーん」
「村の外つれてってくれよー」

と、村の年下の子供らが声をかけてきます。
成人を迎えた人は、村内で働くか、または仕事を求めて（食い扶持減らしもかねて）、領都やほかの街へと働きにと出て行ったりでおりません。
なので、成人未満はお手伝いさんのワタシの様な年上が、年下の面倒をみることによって面倒見（サボり）が許されます。
なにせ、成人を迎えた大人たちは、働き手ばかりの農村である。
その為、人手が足りなくなっているならば、おのずと年長による年少たちの監視者が必要になるわけで……
ただ、今は手が空かないために無視である。無視。

それに、転生した年齢を加えたら、精神年齢はとっくに老人にもなる年数。
まぁ、肉体に精神が引きずられて、市中引き回しの刑になってる気もしないではないが。
それでも、ガキどもが何を言ったとしても、作業の手を止める事なぞ一ミリもない。
今は自分が丹精に育て上げた作物が、順調に成長しているのを感じれば、心の平穏が得ら「せーの……」

「「「胸板、まな板、すっとんとーん！」」」
「んだとゴルぁ!!もっぺん言ってみろやぁぁ!!」
「わー!!怒ったー！みんな逃げろ!!!」「逃げろ」「逃げろ！」
「まちやがれ！このクソガキどもがぁァ!!」

ちぃ!!アイツら散りやがった!!
悪知恵ばかり、だんだん発達しやがって!!
ぜってーとっちめてやるぁ!!!

こうして、周辺の大人たちからは微笑ましくみられながら、だいたいが”自分が鬼”の鬼ごっこが始まるのである。

ま、オリジナルの身体強化魔法（？）を使えば、悪ガキどもを捕まえるのに半刻もかからない。
ついでに、缶蹴りもどきも教えてやる。
缶が無いから、薪用のちっさな丸太の切れ端で代用だが。
おらぁ、みつけたわ!”ドッポリボーグ見つけたポコペン”!!つぎぃぃ!!って、集団でくるだと!?こいつら、えーと、アイツの名前は……ワーラキャッキ…下噛むぅ！長すぎぃ!!
そもそもこいつら、短時間で遊びの知恵が加速してやがるぅ!!

・・・・
・・・
・

ふぅ……昼過ぎにようやく解放され、ついでにストレス発散ついでに見に行った、魔境の奥にある隠し畑を荒らしに来る小鬼（ゴブリン）や豚鬼（オーク）や大鬼（オーガ）や牛鬼（ミノタウロス）に馬鬼（キンナラ）に、その他もろもろの大型の雑食昆虫や腐海魔蟲の奴らも、徹底的に駆除（わからせて）しておく。

そうして、理解できる頭がある奴は半殺し（しばき倒す）にし、本能のみで理解して頂けない奴らは本殺し（ワンパンぶっぱ）でとっちめた後、今日の農作業を急ぎ終わらせる。

雑草取り（意味深）と害虫駆除（意味深）は、とてもとても大事なのである。

なお、お話しては、手伝ってもくれる存在になってくれた豚鬼（オーク）君や大鬼（オーガ）君、牛鬼（ミノタウロス）と馬鬼（キンナラ）君たちには、お手伝いの感謝としてトンボゴロシ（魔境産、食虫・食肉植物）を差し上げておきます。

魔境に生息するでっけートンボ（羽根の全幅が推定１ｍ）を捕食して食いつくす植物が美味しいかどうかの保証はしらんが……なんか、喜んでるようでもあったな。

ただ、その実がね、赤色の液体が滴る肉肉しい果肉だったけどね。

大丈夫なの？これさ……。

ああ、そうそう、転生して性別が”女”になっております。

息子さま（マイサン）を使わなかったのを貫いたためか、神はそれを取りあげた様である。

ふざけんな！

あと、胸囲に関しては、筋トレの成果で無いわけでは無いのである。

大事なことなので、もう一度いいます。

”無いわけでは無い”のである！（胸を張って言う）

#2：いか○たふぁみりーという名の自己紹介

それでは、そろそろ今世における”イカしたファミリー”を紹介するぜ！

父、イゴール

この魔境の森と隣接する辺境農村における、守人班の中でも武闘派のトップハンター。

なにしろ、行ったら帰ってこれないといわれる、魔境の森の深淵層にすらもたった一人で歩き回れて、余裕で生還する言葉数の少ないナイスガイの父親だ。

普通は見つからない様にする魔境の深淵層の巨大魔蟲だろうと巨大ワームだろうと、鬼の形相になっては剣一本、身体一つで乱切りにして渡り合えるイカレタ父親だぜ？

また、国からマーダーライセンスもらってるんじゃねーか？疑惑もあるぐらい、繁盛期の街道にあらわれる賊なんて、襲ってきたと同時に冷徹に容赦なく有無を言わさずに乱切りにする、冷徹無双のヤヴァーイ奴！

母、マクローリン・リーロ

父イゴールを尻に引ける女傑サマ。

この世界における、自分の肉体言語の師でもある。

お得意技は”怒りの右アッパー”、これが炸裂すると天空にふっとばされる……（コワイ

最近は、お年めいてきたため威力が”物見やぐらの天井程度”になってしまったのを嘆いている。（ナニソレ

普段は農作業や魔境の森の浅い箇所で、野草や薬草獲りなどしているが、たまに迫りくる魔獣をその拳で屠っております。持って帰ってきた獣をどうみても、脳天一撃しか傷跡がないから毛皮も売れてウッハウハ……いや、巨大な猪みたいなのを一撃ってなにさ。

そりゃぁ、その拳骨を上から受けると、”痛っ”ではなく”イッ

テェ!!”かつ、とてつもなく”重い”けどさ……というか、殴られたこちらが生きているのは”愛の拳”だからしい。納得いかねぇ……

上の兄者、トゥカー

見た目、爽やか青年でちょっと知性よりな見た目かな……そうかも？

やっぱ見た目だけインテリ風？な感じの細マッチョ。

そんな上の兄者は、父にあこがれたのか、剣を振るうのが大好きの剣術が大スキーな兄者だ！

（ただし、下の兄者には武器全般の才能ではめちゃくちゃ劣るけれど……）

父より指南を受けた剣術で、魔境の深淵部を散策できるツワモノ（オカシイやつ）。

さらにいえば、護衛時には絡め手で相手を翻弄させれば、父と二人で賊の１００人だろうと容赦なしでブツ切りしてたよ？感覚オカシイ。

上の兄者の嫁、義姉、ベラータ・ターラ

上の兄者ことトゥカーのお嫁さんだ。元、お隣さんでもある。

一応、我が家の跡取りとなるトゥカー兄に嫁ぎに来た村娘（ツワモノ）になる。

見た目、お淑やか系な一般人枠かと思いきや、活動的で家事パーフェクト人間。

村一番の屠殺上手（意味深

いやね、トゥカー兄がキャラバンの綺麗どころのオネーサンとイチャコラしてたのを一緒に目撃したときの”次に捌くの、あれ？”と、その表情と雰囲気と言ったら恐怖で玉ひゅんモノ（あ、玉なかったわ）であった。

いつもは母と一緒に農作業と魔境の森に入っては野草や薬草の他に、母が仕留めた魔獣や動物をさっくりと解体しては、お肉にしていただけています。

甥、パナバ

どこの部族名なんですか?と思ったが、幼少名と年少名が違うので、この時だけの名だ!
賢いのかどうなのかは、よくわからんが、空気はどうも読めてる。
特に、自分のカーチャンの機嫌取りがうますぎる。
誰に逆らっちゃいけないか、わかってやがるな、こいつ……
なお、現在における、我が家の癒し担当だ!

下の兄者、ベリガル
上の兄者のトゥカーとはかわって、読書好きで魔法スキーな魔法主体のお方。
見た目は痩せのもやしっ子。なのに、どうみても筋肉はついてるところはついてる奴で、洗練されてる奴ともいう。
あと、上の兄者に魔法や魔術で勝てたところを見たことが一切無いが……ん?
成人を迎えた時に、幼馴染の村娘の姉御と一緒に村から出てったぞ!
たまに届く手紙によれば、それなりに実力のある冒険者稼業をやっているらしい。
まぁ、剣術に関しては、何故か我が家随一というか、村一番だったから、家族一同、あんまり不安にはしてない。
なにせ、魔境の森の深淵部で調べたい事あるからと、剣持たずにそこらに落ちてた木の棒をひっさげて単身でつっこんでいく頭のネジ外れてるヤーツ。もちろん、無傷で帰ってくる。

そして末っ子の長女となるワタクシこと、ラーマ・マーラ。
成人を迎える前に、魔境の森、深淵層も含めて全域踏破してきました。
とてもとても余裕ではあった……が、深淵部にいくと、でっけードラゴンフライとか、空飛ぶムカデ?アノマロカリス?とかもいたりで、”ここ、魔境とかじゃなくて、腐界なんじゃ?”という、剣と魔法のナーロッパ世界とは世界観がまったく異なる、某御大様の様な世界

観ファンタジーなんじゃないかなぁと思いました（まる

まぁ、魔境部には普通に西洋風のドラゴンさんもいましたし、ちょっと気合こめた魔力がちょろっと放出しただけで、尻尾巻いて逃げていったぐらいでしたが……うむ、これは魔力トレの成果はあったという事だな！

えーと……以上だ!!

あと、我が家というか、農村の人達は”天魔族”という一族らしい。ご先祖様たちが放浪の末に、この地に到達して領主に迎え入れてくれたお礼にと、魔境の森から溢れ出てくる魔獣を討伐する任をうけもつ形になっては、代々つづけているらしい。

なお、天魔族とか言われているが、魔人とかと獣人とかと同じで、亜人の一種族を表すだけで、魔王とか魔族とかとは何ら関係がない。

魔がついてるけれど魔人もね、一応。

じゃぁ、天魔族ってそもそもなんぞや？と言われても、そういう一族ってだけで、それ以上はサッパリサッパリ。

ネーミングも、女性だけ「ー」つけたミドルネームみたいなの付けるぐらい？

身体的な特徴を言えば、角とか耳がとんがってるとかそんな目立った特徴は無く、肌の色はアジア系？ヒスパニック系？アフリカ系？と、メラニン色素がちょっと濃い肌色なぐらい。

なのに、髪の色はいろいろいありまして……、青色もいれば赤色も、変わったところで桃色だって普通にいるから、遺伝でもなんでもないっぽい。

ただ、血縁の家族が全員黒髪の中で、自分だけが唯一の銀髪という特徴なので、かーちゃんからは、”わたしの娘だって、一番わかりやすくて良いね。”と言われていた。

そらそうやろうね、村中探しても銀髪は自分だけだったし。

今日も今日とて、その銀髪を辮髪（べんぱつ）のように三つ編み一つ、後方にぶら下げております。

あと、農村にて一番の戦闘力を持つ我が家の男衆の強さランキングを言えば……

剣術に関しては、

魔法オタクの下の兄者のベリガルで、二番手が父のイゴール、ドンケツが剣術スキーな上の兄者のトゥカー

魔術に関しては

剣術スキーな上の兄者のトゥカーで、魔法オタクの下の兄者のベリガル、んで、放出系がほとんど使えない寡黙な父イゴール

という、わけわからない強さランキングです。

カーチャンも武闘派で魔術つかえなかったけど、なんでうちの家計に放出系の魔術が？と思っていたら、どうも母型の父親（じーちゃん）の系では、バシバシつかえて魔物相手にヒャッハーしてたらしく（逸話がゴロゴロ出てきた）たぶんそっちからかな？とか何とか。

というか、その母方のジーちゃんが喜んで下の兄者に教えてたな。何というかホッコリな場面なんだろうね。あたり一面が草原から焼け野原に変わってなければね。

んで、その順番の内容から、兄者たちに言いたい事があったのよね。

それは”趣味と実益が反対やろ、それ……”と言いたくなった。というか言った。

あえてそういうツッコミを入れたら、どっちの兄者も”サックリと出来る方は面白くない”でバッサリと切り捨てやがったよ。

なにせ、兄者二人ともが、”みればだいたいわかる”といって、剣術スキーな上の兄者は魔術完コピするし、魔法オタクな下の兄者は剣術完コピしてくる始末。

もっといえば、さらにアレンジしてきて、複合魔法やら、いくつフェイント的なのいれてるの？剣術の動きまでしてきやがる。

どれも、”思いついた”からやってるだけとか……天才ってこれだから困る。

まぁ、それ以上に最凶なのは”つべこべいってんじゃないよ!”と繰り出される、かーちゃんの”怒りの右アッパー”だ。
それだけで、うちの家では安泰であり十分である。

それでも一般的な普通の人たち（我が農村の一族以外）だと、魔境の森の浅い部分ですら徒党を組まなければ精いっぱいなのに、さらに奥にある深淵部に一人で歩ける親父や兄者たちを基準としてみても、村人の武闘派衆の全員が十分すぎるぐらいに頭のネジ外れてる訳ですがネ！

なお私は、カーチャン直伝のステゴロ最強として、剣術はそこそこ、魔術もそこそこ、教会（集会所）での学術もそこそこ、という格好で通している。一部からは、温かい視線を感じる事はあるが、大丈夫なはずである。

#3：さあ、旅立ちの時

ラーマです。
月日は巡って、そんな私も無事に、成人となる16歳を迎えました。
成人を迎えたという事なんですが、似たように成人した村娘たちは、幼馴染と結婚をして家庭を作っていたりするのがチラホラといたりもします。
まぁ、自分にはそういう幼馴染とかいう存在はいませんでしたがね。
何時も構ってくる奴らといえば、クソガキどもの相手ばかりだったような……？

アイツラ、性懲りもせずに何度も何度も何度も何度も何度も、胸部の事情（ギリリ）を馬鹿にしやがってきてたっけか。

そんなこんなの中、自分としては”ナーロッパ辺境農村あるある”における、長男以外は自分の家庭をもって独立するか、働きに出るかの二択しかない中で、後者の働きに農村を出るという選択をしました。
まぁ、家の中が手狭になりつつあったっていうのもありますが……ね？
そもそも、真夜中に上の兄者と義姉さんたちの、幸せオーラ全開の音が漏れ聞こえてきた時はね、当初は微笑ましくもデバガ……コホン、聞こえてないふりしてました。
が、それがほぼ毎日つづきますとね……
”もう聞きたくねぇ！とか”情操教育もあったもんじゃねーよ！”と、なってしまうものなんです。そうなれば”こんな色声の聞こえる所に居られるか！俺は出ていくからな！というフラグを立てざるを得なかった訳で……（もう聞きたくない
察してほしい、この苦行を。
褒めてほしい、数年絶えたこの私を……（悟った目

それで、今現在、玄関前で家族に見送られているのですが、

「ラーマ、いちゃやー！」

「こら、バナパちゃん、ラーマお姉ちゃんが出立しづらくなるでしょ？」

3歳になる甥っ子ヤベェ……超可愛すぎて死ねる。

出立するのやめよっかなぁ……ってなるぐらい、破壊力バツ牛ンだわ。

「本当に行くのか？」

「ラーマなら、嫁ぎ先ならいくらでも準備するわよ？それに、女の子の一人旅は……」

「母さん、女一人旅っていうけどラーマだよ？心配するだけ無駄ッゲフゴフ、いきなり鳩尾（ミゾオチ）はヤメロ鳩尾（ミゾオチ）は……」

「チッ…」

実はですね、ワタクシ、収穫祭におけるステゴロ大会（男性の部門に交じって）で、3年連続チャンピョンなのです。

つまり、主にステゴロに関しては、我が家でトップというか、農村でトップになってしまいましてねワタクシ。オーーホホホホホ

ぶっちゃけた話、師であるカーチャンに”アンタに教える事はもうないよ。あとは磨きまくるだけ”と言わしめて、”アタシを超えていきな！”と、久しぶりに出場したというトーナメント決勝で対決することになって、普通に勝利を収めました。

いやぁ、ワタクシが1番になり、カーチャンが続いて、その他の農村の方々と、こんな具合になっちゃいまして……イイノカ？ソレデ男衆ドモよ……

なお、後で聞かされたことだが、カーチャン数年間は連覇王者だったらしい。

その出場を辞める為に敗退させたトーチャンもすごいけどさ……

えっ？それがプロポーズだったの？アタシを倒したんだから、旦那として認めるだって？何その逆プロポーズ……

って、うちの家系、脳筋すぎやしないか……？

閑話休題

とりあえず、ツッコミ的に余計な事を言いそうだった上の兄者には気づかせない速さで竜頭拳の一撃を鳩尾（ミゾオチ）にみまっておくつもりだったが、さすが腐っても剣術スキーな上の兄者、勘づかれてガードしかけられたわ……（一応ガードの上から浸透勁でヒットはしてます）

「どうしても、いくのか？」

「オトンも心配？けど、ワタシとしては、村の外の世界とか見てみたいってのもあったから」

「……そうか」

村の外を見てみたいというのは、半ば嘘ではない。

きっかけは、兄者夫婦の夜の営みを、これ以上聞きたくないっていうのではあるけれどさ……

と、黙って手渡されるバスタード・ソード。

オトンが整備したのか、剣帯（けんたい）も新品で金属部もピッカピカになってる。

「えっと、これは？」

これぶん回して剣術特訓をさせられたけど、結局はオカンのステゴロを伝授されるばかりになってしまって、これ使わなくなってオトン、寂しい顔してたっけか……

それを思い出したら、無碍にも出来ない訳で。

「これはお前のものだ。路銀の足しにでもしておけ」

「……うん、そうする。ありがと」

何年ぶりかの再会になったけれど、腰に回して取り付けておく。

うん、これはこれで剣士風に見えなくもないかな。

「ラーマちゃんが出ていくと、寂しくなるわねぇ」
「大丈夫ですよ義姉さん。姪っ子か、甥っ子が増える頃には、一旦帰ってこようとは思いますよ？」
「!?も、もうっ!!ラーマちゃんったら！」

そういいながら上の兄者、トゥカー兄の背中を強くバシバシ叩いているけれど。
トゥカー兄、辛そうだけど、強く生きろ？さっき言いかけた言葉の仕返し分でもあるからな。

「落ち着いたら、手紙を出すのよ？」
「では、気を付けていくんだぞ」
「王都にいったら、冒険者になっているベリガルを訪ねなさいね」
「馬鹿な事して、周りに迷惑かけんなよ？」
「うっせぇ、じゃ、行ってきます！」

そうして、家族に見送られて、農村を旅立つのであった。

村からすぐ出た畑道（はたみち）を歩いては、新しくも特産品となったトウモロコシが実りまくってますなぁ……と感慨深く眺めてしまう。
あれ、成功してポップコーンとして作れる爆裂種が完成した。
そして、その品種は”新たに豊穣の女神様が下賜された品種”とか言われるようになって、あっちこっちで取り合いになるぐらいにすごい事になったのは、懐かしいおもひで……
今は安定供給できてる様にと、各領地で栽培が始まった。
その道の反対側には、いつもとかわらぬ背丈ほどある小麦？中麦……大麦？が生い茂っている。
そんな農道街道をのんびりと歩きだしてたら、背丈より高い麦畑が

揺れたかとおもえば、そこからクソガキと、ちびっ子たちが現れた。
　これはあれか”勝負をしかけてきた!”という奴か?!と身構えたら、そのちびっ子たちから
「ラー姉ぇ、いままでありがとー」
「楽しかった」
「結構、面白かった」
「また、帰ってきたとき、遊んでくれたら……うれしいかな」
「……ん」
「ほら、ボル」
「ん！」
　三者三様の言葉を頂いたあと、クソガキからおもむろに渡される水晶みたいな首飾り。
「えっーと、これは？」
「やる」
「ボル!!ちゃんと渡しなよ！」
「それね！みんなで作ったの！」
「ほら、姉さん出ていくっていうからさ、ボルの奴が提案してさ」
「通しの紐とかは、ちびっ子たちが作ったんだ。ほら」
「おねーちゃん、いままでありがとう！」
　あっちこっちから自分の主張ばかりの言葉を投げつけてくる。
　えーっとまとめると、クソガキの案でちびっ子たちがつくったサプライズってやつか……なるほど。
　……おいちゃん、泣きそうになるじゃない
「うん、ありがとう……」

　と思ったら、何かこそこそしだしてた。

「ほらボル、他にも何か言う事ないの？」
「そうだぞボル」
「ボル兄ちゃん、がんばれ！」
「がんばれ！」

いや、全部聞こえてるんですが……えーっとこれはどういう？もしかして、もしかするシチュエーションでしょうか？ん？

「……チビ姉の金床（かなとこ）おんな!!」

そう叫んでは麦畑に逃げ込んでいった。

ああ、わかってたさ、わかってたさぁ！このクソガキ大将はいつもいつもいつも!!

……よし、その喧嘩買った！

「んだとゴルァ!!!もっぺんいってみろやぁ!!」

そうして、麦畑内において鬼ゴッコがスタートした。

「はぁ……」

「ダメだったかぁ」

「ボル兄ちゃんのいくじなし」

「あれじゃ、もう無理だよねぇ」

「「ねー」」

＃４：旅だった、弾け飛んだ

鬼ゴッコをさっくりを終わらせて、愛のゲンコツを放っては旅立ったその日のうちに、やってきました魔境の森の秘密基地へ。

いやぁ、王都とか領都とかは、成人前に行ってきたんですよ、実は。

大豊作で農作物の卸しに人夫が足りないってんで、家族総出状態で領都にわっしょいと運び込むために移動したもんさ。

護衛のオヤジ様の容赦ない蹂躙劇（カーチャンの前で張り切り過ぎ）があったり、お手伝いに来てくれたお隣さんの姉さんと、幼馴染の姉御に良いとこ見せたかったのか、二人の上の兄者と下の兄者が、コンビネーションアタック（お前ら役割が逆だろ）というのを見せてもらったりしながら、領都には何度か行きましたねぇ。

ついでに、身体強化に増強方法のコツが解って、もう有頂天で走り続けて王都にまで勝手にむかっちゃったりしちゃったんだわ。

んで、一人で王都観光もおわらせてるので、あれから5年以上たつもんだなぁ。

なので、とりあえずといった形で、魔境と言われる場所の中にある秘密基地へと来たわけです。

そうそう、この秘密基地を作りだしたのは１０才ごろくらい？

まぁ、だいたいそんな時ぐらいからで、作りはじめた理由は確か、実験にしてる魔境の森の畑の近くに拠点があればいいよなーと、少年心が復活したのか、身体強化（オリジナル）が出来る様になってから、コツコツとつくってきた代物である。

場所は、魔境の中にある、でっけー霊峰？とでもいうやつの中腹ぐらい？

里とは深淵層をまたいだ先ぐらいですかね。

なお、この基地の峰ぐらいに秘密の畑が、存在している場所です。

まぁ、この秘密基地に来るには、一般的に言う所の、だいぶ楽な道のりだとしても、渓谷の川沿いを登り切って、さらに絶壁をこうクライミングしていかなければいけないところになる。
というか、普通に訪れる事は……無理っしょ？たぶん。
もし、来れるとしたら、王都で見かけた一般人から逸脱した化け物的な人たち？とか、ああいうのぐらいじゃないかな？これそうなの。
自分も最初の頃は、身体強化バンバンつかってようやくな立地の場所ですしおすし。
今は、要領を掴んだので、そこまで強化しなくてもヒョイヒョイといけますけどね。
で、外見の入口はパットはしませんが、一歩中に入ればそれはもう、白亜のごとくの白一色。
そこは、ホテルのロビーなみの磨き倒されて敷き詰められた石。
寸分の狂いもなくきれーいに仕上げております。

これも職人の域（ただ単に凝っただけ）というのでしょうか。

また、なんかしらんけど、自分の魔力（？）をふんだんに”えいっえいっヌン!!”と注入してみると、真っ白くなるんですよね。
この岩盤の地質？岩質？の特徴なのかよくわかりません。
ですが、そうする事で、うっすらと発光していくのがわかったので、照明が不要となっております。

まぁ、ちょっと本気で魔力（？）を注入すると「うぉ?!まぶしっ!!」となったのはご愛敬です。

そんで、ぱっと見ためが、白亜の神殿っぽくなってきたので、こうなりゃ神殿っぽく仕上げてやれ！という自分の趣味領域発動さ。

神殿といえば……やっぱり噴水のある庭園は必要だよね？という事で、水を地下からとおもったら、ちょうど山水の層にぶち当たった

ので、それを流用。
そのまま使う分には、なんか嫌だったので、此処も魔力（？）の”えいっ、えいっ、ヌン!!”と、石や砂利や土や、その他もろもろが入っている、ろ過装置通過して綺麗な水になるようにしてあります。
で、水が湧き出るなら、温泉もあればいいよね？と、探してみたら山の一部からそれらしきものがあるではありませんか。
それを引き込んでは湯場も完備でございます。
ただ、外の景色を眺めれないので、情緒云々はおいておきますが……
そしてそして、そういう所があるならば、と、勢いに任せて大広間に大食堂、ついでに謁見の間に執務室にと、部屋を次々と作っては放置、作っては放置と繰り返していきました。
魔境の森でとれた木材や綿材などなどで、家具も一通り製作済みですが、本棚に本がなかったりしますが、まぁ、これからっしょこれから。

そうそう、隠し通路、これ大事よね。
秘密基地につけておくだけで、ワクワク感が倍増しますし？
特に、豪華な椅子の後ろに地下室なりに続くのは定番よね、定番。
最大級の自信作の中庭には、人口の日の光を再現した照明から照らし出されて、憩いの場としても……

それでさ、ふと、我に返る事って、あるよね……

出来上がった物をよーく考えたら、なんだココ？な状況になってしまいました。
ぱっと見の入り口の外見が神殿？中身はお城？ホテル？
うーん……やっぱ、なんだ？ここ。

某、健康ランドの何でもありな状態？
何がしたかったんだ？自分……
ま、まぁ、避暑地としても有用ですし、別荘としても快適空間にはなりつつありますが……
そうして、中庭のベンチでくつろぎながら、どこに行ってみようか？自給自足は魔境の中でできちゃうしなぁ……と、色々と思案していると、そっと果実汁がお盆に載って渡される。
氷も入っているグラスで、そのまま口にすると、爽やかな香りと、あっさりとした風味、その中に静かに主張する果糖の甘みがあるけれども、それがスッキリと喉にはいってい……

うん、美味しいわ。

「うん、これ美味しい」
「「!!」「!!」!!」

果実汁を渡してきた相手にそう答えると、トンガリ耳の元・妖精？たちがすごい感極まった表情で言葉もなく喜んでるのがわかる。
いつの間にか、住み着いたというか、住み着かせたというかな存在たち。

ちなみにこの子ら、なんかドラゴンみたいなヤツにおっかけまわされてたから、そのデカいトカゲ野郎みたいなやつを、おはなし(威圧)してしまったらしくで追い返したら、その場でなんか気絶してた。
放置するのも何だと思って、この別荘に連れ込んで看病？してみたら、すごくなつかれた。

んで、この別荘の管理を任せるねと、任せていたら、仲間を呼んでよい？となったので、一人、二人、三人、四人と、魔境の森に棲んでいる妖精？たちが次々と訪れては増えていった。

えーっと、君ら、親戚に”泥な手（マドハンド）”とか、いないかな？

まぁ、ハウスキーピングできてるからいいけれど……

んで、お給金と言う話をと思ったら、安全な場所を提供してるから？と辞退され、そして自分と”契約してほしい”とか何とかいわれ、一瞬脳裏にQの名がつく、赤目のぶっころ対象を思い浮かべたが、何でも襲われにくくなるからとか何とかで、それならしゃーないか。と、魔力（？）注入とかで”えいっえいっぬん”（軽め）をしたら、なんか急に成長しちゃってさ……

この子たち、今では、やせ型マッチョなオニーサンと、ボン・キュ・ボンのグラマラスなオネーサンな方々デスワ……

ボンッ……キュ……ボンッ……デスワ……

オカシイ……デスワ……

もしかして、この魔力（？）を込めたら、大改造ビフォーとアフターになるのでは？と思うのは必然だと思うんですよ。

１６０ｃｍにも満たない、この小さな体が成長すれば夢が適うはずと思い、自分にも試しにやってみたんですよ？そしたらね？胸のボタンが弾け飛んだのネ。

弾け飛ぶ内容がネ、こちらが希望する大改造後とネ、大きくかけはなれてタノヨネ？

ナニシロ、大胸筋が世紀末の覇者とかいうケンのシロウのごとくバルクするだけだったんデスケド？

オカシイ……デスワ……

ナンデ、銀色人(シルバーマン)ナ、ジムノ　トレーナーサン　ノヨウニナルノ？
マチョー！ムキ！ストーンナンデスケド!?
タシカニ、コレハコレデ　良イモノデスガ……納得ガイキマセン
……

オカシイ……デスワ……

コレガ、ファンタジーッテヤツ、デスカ……？

「悲シミノ、サイド・チェストゥ」

（……キッチリデキルノガ、マタ、コノ、ソウジャナインダヨオオオ
（血涙

#Ⅰ：神様って、いると信じてる？（上）

神様って、いると信じてる？

――私たちが生まれた理由は、神様が私たちを創造したからと、伝えられた。

何のために、この過酷な森の中に？

――それは、神様が与え賜うた試練の一つだからと、教わった。

この森の中で生まれた私たちは、森から出る事はかなわない。

この森から生まれ出る”モノ”と呼ばれる物こそが、私たちの糧であり、命の源でもあるからだ。

私たちの存在は小さい。

小さいから”モノ”は少なくて済んでいる。

けれど、小さいというのは弱いという事。

小さくて弱い私たちは、魔蟲や魔獣たちからも隠れる様に、この深い森の片隅でひっそりと暮らすしかなかった。

けれど、あの日、私たちがいる村が襲われた。

襲ってきたのは、深淵部にすら現れてこない狂獣と呼ばれる存在。

狂獣は”モノ”を喰らうと教わった。それも際限なく。欲望のままに。

それらから身を守るため、本能なのか勘なのか、狂獣は深い森に来ることなどなかった。

けれど、そのはずなのに、地を這うその狂獣は、片隅に隠れる様に存在していた住処を襲ってきた。

いつもなら、私たちが深い森から出た時でさえ、私たちの事なんて一切見向きもせず歯牙にもかけてこない、そんな取るに足らない存在として扱われたのに、その日は、襲い掛かって来た。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

「どこまで、にげれば……いいの……？」

「わかんない……わかんないけど……逃げなきゃ……」
「おとーさんと……おかーさんは……？」
「わかんない……わかんないって……」
「おとーさん……おかーさん……」

襲われた隠れ住んでいた皆は、散り散りに逃げた。
ワタシも、小さな妹を連れ出しては逃げ出した。
妹も、訳も分からないけれども、危険であるという認識を持ったのか、わたしの手をしっかり握り返して一緒に逃げ出した。

私たちよりも大きな狂獣からすれば、私たちは本当は食糧の一つにしかないのかもしれない。
そんな相手から、私たちは身を隠すように生きていたのに、いままでも見つけられても、一切こちらに害をなす事なんてなかったのに……いつものように、気づかないか、無視してくれるものだと思っていた。

けど、なんで？なんで？なんで？

疑問がたくさん生まれてくる、けれど、今は見つかれば其れまでで……
だから、逃げないと、逃げ延びないと、せめて妹だけでも助けないと……

そう強く思っては、森の中を逃げ惑った。

けれど、小さな私たちの飛翔能力では、逃げる速度も限られる。
隠れては逃げて、隠れては逃げてをしていたが、追いかけてきた魔獣に追いつかれる。

それでも、私は逃げるしかなかった。

ただ、小さな妹を連れて逃げるには限度があった。

だから、私は決めた――

妹を、大きな大木の切れ目の中に隠し、

「お、おねえちゃん？」

「いい？息を潜めて、ジーっとしていたら大丈夫だからね？」

「いや、いかないで！いかないで!!」

「大丈夫よ。あんな狂獣なんて、お姉ちゃんが撒いてくるから……ね？」

「ちがう、ちがうの……」

「それに、かくれんぼは大得意だったでしょ？」

「そうだけど、ちがうの……」

妹は、何かを察してはいるみたいだけど、それを口にさせちゃいけない。

私の決意が揺らいでしまうから――

「これ、お守りね。大事にもっていてね」

「えっ？これって、お姉ちゃんの宝物で……」

「いいからいいから、あなた、欲しがってたでしょ？」

「いらないっ！いらない!!」

拒絶する言葉を聞いた時、近くで魔獣の咆哮が聞こえた。

もう、迷ってる時間なんてない、お守りとなる細工品を妹の手の中に無理やり押し付けて、その場を離れる。

遠くで、お姉ちゃん！という声が聞こえたが、それ以降は聞こえなくなった。

なにしろ、いま自分は狂獣の目の前に出て、相手の注意を引き付ける必要があったから……

……ぬぅ

なんか、嫌な雰囲気を感じ取ったから来てみれば、あれはファンタジーお約束の西洋風ドラゴン（飛べない奴）ってやつかな？

というか、T―レックスだ！すげぇ！動いているの初めて見た！おら、ワクワクしてくっぞ！以前みた、コモドオオトカゲとは、全然迫力が違うな！

って、T―レックスの奴めは、何かを追っかけている感じか？

なんつーか、台所に現れたGを、殺虫剤を片手に追いかけている様な雰囲気とでもいったような？どれどれと観察してみると、そこには、二つの光点が木々を縫うように飛んでいる？

む、むむむ？

だが、その追いかけている相手がいかんな。

ああ、ああ、いかん。

こんなファンタジーの世界において、その存在が十二分にアリエールものを追いかけているとは言語道断！

「とうりゃぁ!!」

「ゴアッ!?」

T―レックス（？）の側頭部にドロップキックをぶちこむ。

その痛みによる怒りの矛先がコチラに向いたのを確認し、半身ずらしの自然体で睨んでおく。

「いけない、いけないなぁ～、こんなファンタジーの定番である、羽根で飛んでる妖精（フェアリー）さんを追いかけるとか、いけないなぁ～お・し・お・き、しちゃうぞ？」

そう言葉を投げかけたと同時に、T―レックスから不意打ちのごとくブレスをぶち込まれる。

しかも、避けたら妖精さんに当たる位置で。

「小賢しいっ!!オカン直伝!消火拳ぃ!うぉらっしゃぁ!」

説明しよう。消化拳とは!
オカンの家事は、たまーにデンジャラスになるときがあるが、その拳に込められた魔力（？）と、魔力（？）の乗った風圧によって炎そのもの方向性をコントロールしては、消火をも行う拳技なのである。

「いっちょあがり!」
「!?
!!」
「#1eY?」

それでも、こちらを睨み込んでくる火を吐くT―レックス。
今度は火の玉ではなく、火炎放射と来ましたか。
けど、やる事はかわらん!

「炎の扱いには、慣れてんだよぉ!!防火掌底打ぁ!」

説明しよう!防火掌底打とは!
掌底に集めた魔力（？）によって、それ以上、火が燃え移らない様にする技である。
火元に返すという事もするが、これ、密閉場所だとバックドラフトみたいな事なるから危ないから、みんな、マネしちゃだめだぞ?

ただ、この炎の熱さ……熱い、熱いぞ……こう煮えたぎる熱さ……
うぉぉぉ、燃えてきたぁぁ!!

「もっと熱くなれよ……熱い血、燃やしてけよ……熱くなった時が、本当の自分に出会える……だからこそ!もっと!もっとぉぉぉ!!熱くなれよおおおおおおお!!」

炎に当てられてしまったのか、ついついそういっては魔力（？）のほんの一部を放出してしまった。
そしたらＴ―レックスは、首をすくめたかと思ったら急に尻尾巻いて逃げ出しちまった。

「……なんで？」

炎吐くＴーレックスなんだし、もっと火力上げてもよかったのに？
オカンのたまに暴発する火力なんて、この火じゃない…もとい、比じゃないのにさー

まぁ、いっか。
そ・れ・よ・り・も

妖精さんですよ？妖精さん！フェアリーって奴ですよ？
某、女神が転生する奴でも、上位にランクインするレベルで相棒とも称されるアレでございやす。
こりゃもうね。友好的かつ紳士的……いまは淑女的にか？で、第一印象を大事に接触を図るべ……

「気絶してらぁ……」

さて、どうしたもんだか……

#Ⅱ：神様って、いると信じてる？（下）

何も聞こえない、何もわからない……けれど、けれど、何かが私の手を握っているを感じる。

静かに目を開けると、白い空間に、白い天井に、白い壁に……

「おねえちゃん!!」

ふと、手に降れる感触を見ると、妹がそこにいた。

「えっ？って、隠れてなきゃ……って、ここは？」

「わかんない……」

妹から詳しく聞くと、魔力禍といえる物を感じたから、わたしに何かあったんだろうと思って隠れるのをやめて探しに来た時、わたしを連れて行こうとする相手から、助けようとしたら一緒につかまって、ここに連れてこられたと。

「ワタシたち、どうなるの？」

「わからない……わからないけど……悪いようにはならないって、思う……なんとなくだけど」

「なんで……？」

擦り傷や切り傷など、逃げる時に負っていた物が全てなくなっている。

それに、この部屋の魔力の感じは、居心地が良いし、温かいし、まるで慈愛に満ち溢れている様な感じさえする。

「#ＧＡ０#Ｂ＊Ｚ～＝＿」

大きな部屋の扉から、誰かが現れる。

何を言っているか、わからないが、その魔力の質は、私たちを敵対する気配を感じられない。

むしろ、温かく包みくるむかのような、優しく、まるで上位の存在のソレであったから。

「お姉ちゃん……」

「大丈夫よ……〝併せ〟を」

「う、うん……」

私たちの種族にある、言葉を知る為の相手との併せを行う。
何を伝えようとしてくるのか、それを理解するためにだ。
狂獣にも行ったけれど、”食う”や”喰らう”としか返ってこなかった……再び、そんな恐怖が蘇る。
”安心していい。T―レックスはもういないよ”
T―レックスというのが何なのかはよくわからないけれど、優しくそう語りかけてくる存在に、包み込まれる優しい”モノ”に……涙を零していた。
そして、ふと思い出した。

――試練を乗り切った時、その目の前には神は現れる
――慈愛と感じる優しき”モノ”と共に現れ、われらを導いてくれるだろう

伝え聞いていた伝承を思い出した。
まるで、この時、この状況を表すかのように……

「お姉ちゃん？」
「降臨されたのですね……導きの女神様……」
「えっ？あの方が、女神様……？やっと、やっと助かるの？」
「ええ、そうよ？私たちは、この女神様に出会うために、その命があったのよ……」
「な、なら、おとーさんと、おかーさんも……助かるの？」
「ええ、ええ、きっとそう、そうなるでしょう」
「よかった・・・よかったよぉぉぉ」

妹と二人、この女神様に会えた奇跡に感謝で泣きだしてしまった。

あかん、こういう涙ボロボロ流されてる、お涙頂戴モノってのはあ

かんねん。
中身おいちゃんだと、こういうの弱いねん。
優しく妖精さんたちを抱きしめては、あやしてしまうねん。
「もう、大丈夫、大丈夫だからね」
なんかね、姪っ子の面倒みてるぐらいカワイイすぎてね、犯罪者にすらなりそ……いや、なったらダメだな。
ただ、あやしてる時に、こちらの服をつかんで何かを訴えてきていたのは解った。
訴えてきているのはわかったのだが、いかんせん、何を言っているのかが、わからないというか、何語なん？それ。という始末です。
しばらく、問答を繰り返して、こちらが理解していないのがわかったのか、今度はボディーランゲージで訴えてきたのだが、えーっと、何だこの、お遊戯みたいなの、すっごく微笑ましく見てしまう。
まぁ、なんとなーく妖精さんたちが困っているってことは、わかった。
そう、妖精さんたちである。
つまり、もっと存在しているであろうと推測する。
するってーことはだ、あの”T―レックス”もどきの奴、こんなカワイイ妖精さんたちを”いぢめている”とかあるのかね？あるのだろう。
なるほど。
なるほど……
……

《ゆ〟る〟さ〟ん〟!!》（某太陽の子声）

こうしてはおれない。

善は急げとも言うだろうから、速攻で外に出てはTーレックスもどきのトカゲたちを〆てくることにした。

そして、一匹、一匹に〝てめえら、よそのシマはしらねーが、うちのシマで妖精さんたちに手出しすんじゃねーぞ?!アァン?〟と、睨み（ガン飛ばし）と魔力（？）みたいなのを強く飛ばしておいた。

なにせ、あいつら魔力（？）でサーチしたとたん、大小さまざまに、このアジト周辺にも蠅や蚊の様にわんさかわいていたので、もうね、ぶっとばし（おはなし）しまくりですわ。

というか、以前、そんなに出会うことなかったというか、いなかったというか？いつのまに増えた？

まぁ、そういう何やかやあっては、元・妖精さん《たち》を保護する事になりもうした。

ただ、泥の手（マドハンド）レベルで「なかまをよんだ」という奴を経験することになったが……

前世自分、「しかし、だれもこなかった」経験を思い出させないでくれ……

私たち、妖魔族は「我が〝主〟」に出会えることになった。

当初、一部の者たちは、我が〝主〟を信じられないという事で、疑心を抱いていた。

そこで、老の一人が〝伝承の通りならば、契約の儀を執り行う事で、私たちの種族は、上位の存在へと至るはず……〟と口にした。

だが、”それが違えば、その身は”モノ”へと還元され、消えさっていく”とも。
誰もが、自分という存在が消えるのが怖い。
立候補する者は当初、だれもいなかった。
けれど、ワタシは、ようやく訪れた主の降臨を否定することが、もっと怖かった。
だから……
「私が行います」
「お姉ちゃん!?」
私は、確信を得ている。
なにしろ、我が主は、わたしのキズを無かったものにする程のお力をお持ちなのだから。
そうして、ワタシは契約の儀に赴く。
「大丈夫。大丈夫だからね」
我が主の温かい”モノ”が、内包している私の”モノ”と混ざり合う。
その”モノ”……いえ、正確に言えば、主との神力と私の”モノ”が絡み合い、ワタシという存在が、違う存在へと、階位を超えていくのを感じる……

あぁ……とても慈悲深く、慈愛に満ちているというのに……

目を開けると、妹が小さく……違う、私が大きくなったとわかった。
それよりも、我が主よりも高い視線になっていた事に恐れを抱き、すぐに地へと首を垂れる。
身体が大きくなってしまったものの、背中の羽根が消えて……いえ、羽根じゃなく、翼になっている?
「おぉ、おおぉぉ……伝承は、本当だった……」
「「おぉぉ……」」
それからは、みんな、我が主と契約の儀を執り行った。
みんながみんな、大きくなった姿となっていった。

翼は出したりできるようになったため、この神域にいる時は仕舞う事にしている。

一通り、契約の儀が終わった後、私たち一族は”我が主（神）”に仕える身とし、御使いとしての役目を果たそうと決めた日でもあった。

そして我が主は、自身にも”神力”を使い、逞しい程に変わられた。

ただ、御身の胸元を触れながら「バスト……バルク……バスト……」や「悲しみのサイド・チェストゥ」と涙声で呟いておられましたが、何を意味していたのかは、誰もが解りかねていた。

もしかして、私たちへの挨拶だったのかもしれない……のでしょうか？

1：カミを祭る国
#壱：初めての耳

はい、こちらラーマです。

自分は、今、魔境といわれる領域を”自分の故郷とは真逆の位置”まで移動し、さらにはその先へと進んだところに来ております。

途中、ゴトゴトと揺れる荷馬車（？）に載せられる格好で、荷台から見える格子の隙間から覗き見える風景といえば、空に飛ぶ鳥たち、初めて見るよその国の草原。

それらを眺めては、こういう風土になっているのか……

と、安心できる静かな自然が、こうも豊かなことを感じさせてくるものなのかな？と感じております。

なにせ、自分ちの実家近くの森なんて、自然が豊かすぎて逆に牙をむいてくる自然ですし。

命懸けという自然よりも、ただただ風景が流れていく自然の方が、病みかけた心が少しでも癒されるというものです。

と、そんな荷台にて、重量感のある金属性のアクセサリーをジャラジャラという音をＢＧＭに見立てながら移動しております。

俗にいう、鎖につながれた状態で貫頭衣一枚の亜人の方々と一緒にネ!!

いやぁ、長耳（エルフ耳！）とか、もふもふ耳（獣人耳！）とか、今世でここまではっきりとした亜人の耳なんて、初めてじっくり見たね。

前世だって創作物にしかないし、こういう本物なんていない。

ましては、子供時代に突貫したナーロッパな世界のはずな領都や王都ですら、一切見ることもなかったファンタジー成分が、この小さな密閉空間で全開しておりますよ。

これはね、多少興奮しても仕方がないと思います。

ただね、惜しむらくはエルフ耳の人って美形ばかりかと思ってたら、普通に普通の顔ばかりだった。中には、髭面のオッサンもいるし、筋骨がしっかりしている方だっておられる。

というか、三個のトライアングルな世界のハイなラルにいる人たちみたいな？そんな感じとも言えます。

一方、獣人って、人の顔で獣耳が頭頂部にあるかと思ったら、あるにはあるのだけれど、獣頭で人の体っぽい恰好がほとんどだった。

いや、人の顔でと思ったら、そういう人はいないというか、普通の人の耳の箇所が毛むくじゃらの耳？になってるという、なんというか、羊？ヤギ？、巻きヅノがあるから、そのツノはちょっとかっこいいかなと思ったりはするけど。

ただね、惜しむらくは、同乗している方たちが、どうみても”野郎”ばかりでした。

も一つ言うと、どの方たちも”この世の終わり”という表情をしながら首を垂れては座っています。

そんな仄暗さと湿気が蔓延する中にいるのはなぜなのか？

鎖につながれている時点で、大まかというか答えがほぼ出ていますよね。

つまり、人身売買（そういう訳）だと思うんですよ。

というか、それ以前に問いたい、問い詰めたい、小一時間ほど問い詰めたい。

ここに入れろと決めたやつ、お前どこをみて「野郎の馬車に積み込む」を選択したのかと問い詰めたい。

もう一つの馬車は、お姉さんたちバカリだったというのに、なぜそちらではなかったのかと問い詰めたい。

ふぅ……落ち着こう、物は考えようである。

いま現在、ロハ(タダ)で移動手段を手に入れたともいえる訳である。

ちょっと、いや、かなり獣臭いのは、その……慣れてしまえば、どうという事は……

慣れ……窓際に移動しとこ。

うん、乗り心地が最悪だし、乗り物酔いしたら悪いからね、シカタナイネ

さて、本題にもどりまして、同乗する理由としては、なにせ、向かうはよそ様のお国である。

そのため、”地理などの知識はさっぱりわかりません”ってところがある。

また、こうして商品として扱われているって事でもあるならば、つまり、表の稼業だろうと裏の稼業だろうと、とりあえずはそこそこ大きな街につくだろう。という打算が出てきたわけです。

というかするっしょ？

するよね？このまま僻地の開拓村へポイッはないよね？

なにせ、聖神国っていう仰々しい名がついてるし、ＬＩＧＨＴでＬＡＷな国でもあるでしょうし。

いやまて、逆にあの世界みたいなＬＩＧＨＴでＬＡＷな国なら、普通にやりかねないか？

選民思想がどうとかを空間歪曲レベルな思考で。

……

ちょっと自信なくなってきたわ……

い、いや大丈夫。

こんな手枷や足枷なんぞ、いつでも”えい、えい、ふん!!”とやれば、

あっというまに解決できましたし。
というか、やってしまって”ヤバッ!”って思ったりして誤魔化すために、”ふんぬっ!”と戻しはしましたが。
あぁ、お空が青いなぁ……
そもそも、こんなところに来たのには、一応は目的がありまして……

#弐・マホーショージョ、怖っ

新たな国へと旅立った目的。
それは、元・妖精さんたちの肉体を変化させた”この自分のオリジナルの魔法？魔力？魔術？というものが、一体何なのか？”という疑問から始まった。
なにせ、元・妖精さんたちの肉体を改造できたり、自分自身を魔女でもなく肉体改造（マチョ化）もできてしまうからである。
そういえば、植物に対しても品種改良という認識でしかなかったが、これもよくよく考えれば、一世代においての生命的な改造？変態？がなされているという事でもあるな。
ってことはだ、遺伝子レベルで分解なり再構成なりされて、変異や変態なんて事をやってるわけだ。

……なにそれ、普通に考えたら怖。

そういえば、ニチアサのマホーショージョたちって、変身する度にこんな事をやってるってるともいう。
物質変換もあれば、物質創造までやるとか……

ニチアサとかのマホーショージョ、怖っ

という、しょうもない前置き（？）は置いておいて、今いる世界の魔法や魔術には、そういう事が出来ないのは、小さいときに集会所の勉強会で習った。
見た目を変化させるものであるならば、例えば、相手に誤認させる幻惑みたいないものだったりというのがあるというのは習った。
けれど、見え方を誤魔化してるだけ（それはそれですごいけれど）で

あって、根本的には肉体は変わってはいない。
見た目ではなく中身を変化させる方法であるならば、身体強化という形で肉体の強度や筋力などを底上げしたりするのがあって、例えば、カーチャンの天地が覇王の拳”一撃必殺!”の必殺技を伝授された時がまさにそれ。
あと、原理がよくわからないままだったが、魔法の定番といえる放出系の火の弾とか飛ばしたり、水を出したりする奴ぐらい。
けれども、物質そのものを大きく変異させたりするのは、集会所での魔術の授業でも、身内からもそういうのを習ったり教わったりした事はなかった。

というか、”そんなものは無い”とも言われた。

そもそも、この変な魔法（?）らしきものは、身体を動かす事がまともに出来なかった乳幼児の頃に、暇という時間を持て余した為にやってた事で、誰からも教えてもらう事もされずに独学で取り組んだ結果、みつけたモノである。
前世知識を活用し、やっとこさ感じ取った魔力?なる物を”えい（濃縮）!えい（凝縮）!むん（収束）!”とやると、魔力とは異なるナニカに変貌する事を発見して有頂天になってた自分がいたね。
で、どこからそうなるのかと、凝縮というか収束の方法を、１の器に１を入れるところから、０．１の器に１を無理やり入れる、それを０．０１の器、０．００１の器と桁を変える格好でやっていった。
何度も検証した結果”虚空（１０の—２０乗）”以下の器に”那由多の桁（１０の６３乗）”以上の容量を収束してから変貌してしまう恰好になる事は突き止めた。
まるで、”清浄な不可思議（１０の—２１乗　１０の６４乗）”な経験って感じだったのを覚えている。

けれども、成長して集会所での勉強部屋に通う頃、自分はもう出来

るんだぞーと、ワクワクとしながら集会所で魔法の事を一から教わったときに”アレ?”と思った。ナンカチガウと。

その時に、一番気づいた事を上げるならば、魔法や魔術ではできない、キズや病だって治せるほどの万能な代物と気づいた点である。

ちなみに、教会の牧師様は、奇跡を使って小さな傷を癒すとかいってたけど、どうみても普通の地方診療的な医療行為だった。

あとは、掃除で綺麗にする事がしやすいとか?ピッカピカにも磨きやすいとかかな。

そうそう、除菌みたいな事もできてたはず。

衛生管理は生き延びるのに必須でしたから必死で”出来ろ!”と取り組みましたし、あと、その逆に発酵や促進もできたので、漬物も美味しくできました。

けれども、この不可思議魔力（？）に関して、他には何かないのかと、一時は農村の中の集会場にある小さな図書棚を漁ったり、魔法オタクの下の兄者や、かーちゃんのじーちゃんから色々聞きだしてみたが、それらしいことは一切出て来なかった。

そこで、今更ながら、もしかしたら元・妖精さんたちなら、何か知っているかもしれないと聞いてみた。

すると、ご年配の方（ご老人らしいけど、どうみても若年にしか見えない風体）から、そういった伝承があったとかなかったとかで、長い長い昔話をされては、その話の結末から”神の御業、神力そのものでございます”と伝えられた。

……

カミサマのミワザ……シンリキ……?

ナンデスカ、ソレー?

という新たな情報に、さらに混迷に拍車をかけてくれる訳が分からない回答を得られた。

そもそも、話の中に出てきた、この魔力を凝縮?濃縮?する方法っていうの、わいらの一族は普通に使う。
ただし、自分みたいに変質はしないけれど。
というか、下の兄者が自慢げに”凝縮して溜めておいて、後で還元して魔法発動するほうが、魔法の質と威力が段違いになるし、融通きくから便利だぞ?ラーマも覚えておきな”と、魔法オタクの下の兄者に、子供の時と教わったのだが、その後、習ってみれば村では常識の範疇であった。

圧縮や濃縮方法を自分が見つけたと思ったら、下の兄者どころか村では常識だったのが悔しかったので覚えている。

とまぁ結局は、元・妖精さんたちでも、詳しくは分からないという事が分かった。

この”清浄な不可思議なもの”になってしまっているのが気になって仕方なくなったので、これは徹底的に調べなければ!と、研究職だった前世の血が騒いだのか、調査の旅に出ることにしたわけです。

そうなってくると、やっぱり”異世界あるある”の「宗教国家」にでも赴いて調べてやれと思ったわけです。

元・妖精さんの仰られる(そういえば、言葉わかるようになったな)には、神様の御業とか何とか言っていた。
ならば、そういう”カミサマ”関係ならば、何かしらの情報が得られるであろう場所があると。

なにせ、この世界には”勇者”がいるのである。あれ?いまだと”いた”か?まぁいいか。

そして、勇者の物語が語り継がれているのである。
実家の農村の公民館的な大きさの教会でも、文字の読み書きの教科書として扱われた聖書の物語の中に、そのパーティーメンバーの中に”神の力”といえる”神術”とか”法力”とかいう聖職者や聖女様が登場していた。

聖書?教科書?で、そういう教えが使われていたぐらいである。

となると、そう言う場所には、神様の威光や奇跡なんて物もあるはずで、元・妖精さんの言う、自分が使っている”神様の御業”つまり”神力”っていう物の、何かしらの手がかりもある、という寸法です。

それならば、総本山の”聖神国”で詳しく知るために突撃ぃ!と考えに至った訳です。

そうして、新たな土地へ踏み出し、第一宿場村を発見しては突入し、宿にて夕食をとったら、とてつもなくすごい眠気がきたので個室のベッドにダイブしたわけですよ。

そしたらね、気が付けば格子に囲まれた荷車の上に”ポイッ”されてました。

どうやら、旅人狩り(?)の村とはしらずに、一泊してしまった模様。
土地が違えば、国も違いますし、文化も違うものなんですね。

治安の違いがここまでだったとは、このラーマの目を持ってしても……

朝日が昇った頃合いには、荷馬車がゴトゴトとラーマを乗せて行ったわけです。

同乗者もいたけど。

あと、やっぱりとなりの荷馬車が良かったよ。

なにせこちらの荷馬車は、加齢・泥・汗・獣の三重奏をかなでてきてるし……

おねーさんたちが乗り込まされて行ってたし、あっちの方が匂いいかもしれないし……

ちくせう!!

自分をこっちの荷車に載せたやつ、覚えておけよ！コンチクショーメ！

#参・異世界の車窓から

異世界の車窓から

今日は、”聖神国”と思われる国の街道を進む車両から――

異世界には、色々な風景があり、それらは、乗り心地の悪い車体にゆられ、時折、荷車の中から流れてくる”うめき声”ともいえるＢＧＭと共に、ゆったりと時間が流れていきます……あと、とてもクサイ。

見える景色は、草原があり、川があり、荒野があり、森林があり、食事があり……あと、荷台に虹色（ゲロ）の装飾が新たに作られた。

そうして運ばれている道中、出される食事なるスープは、塩味だけをきかせただけの、素材の味を生かした代物である。

一緒についてくる皮付きの芋も、これもまた、素材の味を生かすために茹でただけの物である。

たまに出てくる干し肉らしきものは、塩味をしっかり利かせすぎて、保存を第一に適応させた代物なのだろう。という考えをさせてくれる物が提供されています。

一緒に乗っている同乗者たちは、それらに手を付ける者もいれば、無視して何も食さない人もいます。

そういった仕置きをうけながらも、タダで便乗する日が続いていきます。

この道はいったいどこまで、そして、どこに続いているのでしょうか。

途中、町らしきところに立ち寄っては、載っていた人たちが一人いなくなり、二人いなくなり、三人いなくなり……と徐々に減らし、荷台の中の一人当たりのスペースが、だんだん広く確保されていきます。

……えっ？あれ？自分、売れ残り？

魅力なしなの？やはり胸か？胸が必要なんか？
せめて、たわし以下の金額で取引きはされないでほしいかな？
耐え難い事で、イキュラしたくないし……

とまぁ、余裕がありそうな変な奴隷根性を生やしかけていました。

というかね、奴隷の象徴ともいえそうな、この魔法が発動しなくなるという首元に薄く光る首輪みたいなものが、元々はここにあるのが当たり前というぐらいに、フィット感を感じてしまっている状況です。

あと、自分の扱う不可思議魔法が、一般とは異なりすぎるモノなのか、こういうアイテムの効果が一切効かない事に気づきました。

それは、茹で方があまかった半生の芋を食べる気になれなかったので、何とかなりませい……と”ギヴ！アップッ！ＳＡＹッ!!”と込めてみたら、何とか食えるものに変化したことで発覚した。”あれ？使えるじゃん。”と。

あと、ついでに言うと、その時、首輪君がサラサラと粉みたいになって消えていった。

んで、”あ、ヤッベ気づかれる!”と思ったために、今は似たような物の作って首に巻いてます。

……あれ？
今ごろになって、さらに気づいた。

何であの時”気づかれる”と思って作り直したんだ？
何故？
謎は深まるばかりで、うーん……？

……ま、いっか。

なにせ、この国の地理をしらないし、ちょうどいいかと便乗した訳で。

つまり、そういう訳で、そういう事なのです。

とまぁ、色々と考えさせられる事もありましたが、軽装備だったけれども旅荷物云々が無くなったのは痛手なぐらいで、ぁ、オヤジ様から、旅の餞別にと頂いた、カスタムしたバスタード・ソード（無くした時用にと、ガキんちょ達から餞別で頂いたペンダントに、例の神力？でマーキングした物を埋め込んだ代物）も、どうやら別の馬車で一緒に持ってきてくれてる様です。

どこかで落ち着いたら、少なくとも、あれだけは取り返すべきですかね。

ほんと、こういう時に、空間収納とかあれば便利なのになーと思ったりはしましたが、そういうのは無いとも教わった。

よくあるナーロッパ世界みたいな感じなのに……

〝異世界あるある〟っぽい奴ですけど、この世界ではダメみたいです。

ただ、はっきりわかった事といえば、物質変換という奴はあるみたいです。

肉体変化とかしてますし、首輪も作り直しましたしね。

というか、出来る事を出立前のあーだこーだで知りましたね。

この変異した魔力（？）神力（？）って、ほんと、変化的なのは好き勝手に思うようになるみたいです。

その、知ることになった出来事はというと……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

妖精さんたちの身体が変異したのをきっかけに、自分にこう弄繰り回すをしてたら、一応、バルクがバルクになって成長した姿にはなれました。

イメージしてた胸の種類ちゃうねん……

これ”膨らみ”やのうて”厚み”やねん……

と、悲劇に見舞われたあとで、あ、これって、もしかして、もしかしたら物質的なもの、例えば、両手を叩いて地面に触れたらっていう錬金の錬成みたいな感じにならないかな？とね。

ファンタジー力でいろんな物、作れるんじゃね？と。

まずは実験として”えい、えい、ふんぬっ!!”と想像力と気合と熱意を、秘密基地の壁に手を当ててぶちこんだら、白亜の刀剣たちが生まれ出てきましたね。

壁から、床から、天井からも。

……ハハッ

乾いた笑いしか出なかった。

ファンタジー力恐るべし……と。

その時に、色々とオタクパワーで妄想したためか、いろんな形の剣やら刀やら槍やら鉾やらが、剣山かの様に怒涛の如く溢れ出てきた時は、正直、ビビりましたが……

というか、七支刀って何よ、七支刀って。

これ、実戦にどう役立つんだよ……

なお、それらは全部、月白？白亜？もう、ようわからんけど柔らか

い白い色に淡く光る形となっております。
そして、それらは秘密基地の標準装備品となり、それらを扱えるように元・妖精さんたちと、あらたに加わった方々が、日々、研鑽してるみたいですが……その様子を見に行った時に、

元・妖精お兄さんズの、弓使いが超ヤベェ、金属製の弓と弦を三矢同時撃ちとかでつかうその腕前もすごいけれど、その姿が様になりすぎてて怖い。
これ、ロードがリングとかのどっかの俳優さん？レベルなお姿だよ。

あと、何気に七枝刀つかってる、元・大鬼（オーガ）のお兄さん達が、超絶テクニシャンで、相手の武器をからめとって、というのをしててめちゃくちゃ使い込んでて驚いた。
つーか、元・大鬼（オーガ）衆のサムライ的な刀術かっけぇ……

ほかだと、元・小鬼（ゴブリン）衆のニンジャ的？アサシン的？スパイディ的？な動きキメェ……
何だよあれ、投げ苦無にワイヤーからませて、立体起動さながらに使いこなしてるよ。
射出装置ないのを技量や技巧でカバーって、そういう使い方なん？あれ。

ま、まぁ、いろんな使い方があるんだなぁと、感心してしまった。

その中でも特に関心を持たざる得なかったのが、ランスやハルバードにグレイヴとか、長物武器を扱うチームのお姉さん方々。
その、背中の翼を展開しては空中で訓練してる姿が、どうみても戦乙女（ヴァルキリー）っぽく見えた不思議。

ただね、ただね！

薄着の布切れ一枚の上半身……、あのグラマラスなスタイルとなるとね……、とある場所が”バルンボルンしよる”のを見せつけられてね……

見せつけられるのは！！忍びなかったので、鎧一式も準備させて頂きました。

耐え難きを耐えた人たちって、尊敬に値します……ハイ……

あの時は疲れた。

なにせね、全員分となると、さすがの自分も疲れましたよ。

一人に作ってあげると、他が羨望の眼差し状態なんですよ？そんな視線に耐えれませんよ……

注文受付で、男性陣と女性陣でも意匠とか替えた方が良い？

同じ色見になってるけど良かったんですかね？え、よかった？そうですかハイ…

鎧飾りなどは、各人のチームや種族でそろえるらしいので、そこは、お好きにどうぞとしておいた。

ただ、元・大鬼さんたちにはこだわった。

和装の鎧甲冑ってかっこいいじゃん？面頬とかもこだわったよ？

鬼神っていう格好になれるぐらいにさ。倭刀とか長刀とか長巻とか脇差とか十字槍とか。

なぜに詳しいかって？

刀剣の類は、男の子の嗜みであるからだ。なお、返事は聞かないゾ。

その後、とりあえずの達成感を得られた後、自分の魔力（？）調査に赴くべく伝えると、付いてくるとか言ってたけど、一人でウロウロする方が何かと融通が利くので、お留守番とアジト周辺の警邏や整備とかお願いしておいた。

昨今、『おまえ、どこ中よ？』な感じの季節風に、T―レックス（？）

くんさんたちが、またも徘徊しはじめてるそうなので、最悪、畑に被害が及ばない様にとお願いしておいた。

無益な殺生は禁止で。もちろん、無益じゃなければ、成敗してよろし。

生態系を狂わせないぐらいでよろしく。と。

そうして、ようやく一人単独という事で、色々とその摩訶不思議な魔力（?）を使う事で、身体をいじくって変化させた格好で出立した……。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

いまでは、懐かしい思い出になっております。

「おいクソガキ、とっとと降りろ!」

とまぁ、話は脱線しまくっていたけれども、ついにお呼ばれされる事となりました。

強制的に小脇に抱えられる格好で降り立った先は、いつの間にかどこかのお屋敷？みたいな裏口。

どうやら売れ先が決まったようです。

そんなこんながありましたが、新しい国では子供Ｖｅｒ（にくたいへんけいのじゅつ）の姿で、奴隷商の商品となっている状態からＲＥ（リ）：スタートです！

というか、子供の商品を購入する層って……（察し

＃イ…もう、終わってもいいよね……

石壁に囲まれている薄暗い部屋。
外から差し込んでくる光は、小さな窓口から入ってくる程度のもの。
いや、部屋と呼べる代物とは言えないソコは、鉄の格子によって閉ざされていた、一つの区画。
すくなくとも、木の床が存在している石牢とでもいえる場所に、一人の少女が横たわっていた。

”ワタシはいったい何時まで、いられるのだろう……„

少女の表情は、すでに感情というモノを損なわせ、流れだす涙というものは、とうに枯れ果てていた。
何もすることができない、何もすることもない、身体を動かす気力さえ削がれてはいたが、その中でも、何かをする気力すら無いために、過去の思い出にふけるしかなかった。

思い出、それは懐かしくも、温かった——
それは、冷たくも、悲しかった——
そして、そこから考えていく。
自分という存在が、如何して生まれたのだろうか?
私という存在は、何故に存在し続けているのだろうか?
それらを何度も、繰り返すしかなかった。

少女は、同じ事を、何度も思い出していた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

少女は、代々、炎神に仕える一族の長の”手付き„の、妾の娘とし

て生を受けた。
母は優しく、そして少なくとも炎神の一族としての役割として、その愛くるしい容姿と、生まれた時の一族のならわしによる儀式で、直系よりも優れた能力を持っていると分かれば、多大に期待された。

そして――妬まれた。

また、少女が育っていくと、当初、期待されていた視線は次第に消え、侮蔑ともいえる視線へと変わっていった。

それは、少女の身体が問題になったからだ。

生まれ出た時は、一族とかわらぬ肌の色をしていた。
だが、それが年齢を重ねる度に、徐々に青紫にかわっていったのだ。
それに釣られる様に、目の色も黒地に蒼い目となり、見た目は一族とはまったくかけ離れた、異なる存在、まるで異種族の亜人の姿へと変わっていったからだ。

その姿が顕著になってからは、周囲からの視線は、ただただ”侮蔑”を含むだけになっていく。

なにしろ、現代当主、つまりは現在の本家に連なる血筋には、その様な身体的な特徴を持ったものが記載されていない。

一族の血が流れていないとさえ言われるのに、もう一つの理由もあった。
それは、一族が持っているはずの”血の力が使えない”事も、その証左の一因にもなった。

母は、確実に父の娘であると訴えた。

それ以外に、関係を持ったという事も無いとも、強く訴えた。
だが、”異種族の種による子だ”という正妻の言葉により、その言葉を信じた父と周りの者たちから、母の地位は追いやられた。

そして、実父とその正妻、そして実子達から疎まれていく事となった。

本家の父……頭首たちからは、自分たちの家族は下人という扱いとなったが、その対応が子供心に普通だと思った。
いや、今ならわかる。思い込まされたと。

自分は、一族とは違う存在であると、正妻やその実子の息子たち、果ては父であるはず存在からも、そういわれ続けた。
だが母は、一族の血筋である、現当主が実父である事は間違いないと、強く強く教え解いていた。

だが、その肌の色が問題になってからは、本家からは家族共々に虐げられる恰好で、与えられた仕事に従事する事で日常をすごしていった。

年中、手にアザを作り、体中を酷使し、それでも生きていた。
いや、”生かされていた”と言えなくもなかったが、その与えられる仕事を、辛いと思わない訳はなかったけれども、そばにいてくれた母親が、いつも自分に優しくしてくれたので、辛く思うことはなかった。

『”サグア”には、必ず光が当たるわ。そう、温かい光を差し伸べてくれる方が必ず現れるから』

そういっては、優しく抱きしめては、身も心を慰め、暖めていてくれた。

それが、サグアの心を救っていた。救われていた。

サグアは、温かい光を差し伸べてくれる人って、どんな人だろう？と、幼少の頃、読み聞かされた物語に出てくる、魔王を倒す勇者様の様な、悪い相手を成敗してくれる存在なのだろうか？と、思いを馳せていたこともあった。

けれども、歳が上がるにつれ、仕事の量は増やされ、辛い日々が続いてはいたが、母親のあたたかな愛情で、そこまでつらくは思わなかった。

つらい日々が続いていたが、それでも二人は幸せだったと思う。

そして、サグアが１６歳の成人を迎えた年、母が他界した。

原因は、過労による病死と言われている。

私が成人を迎えるにあたり、些細なお祝いにと、余計な仕事を受けていたらしい。

その無茶が祟ったのか、私が成人を迎えて一月後に、この世を去った。

最後の言葉は、

”一緒にいられなくて、ゴメンナサイ。私の分まで”幸せ”にね……”

謝罪と子の事を願って、去っていった。

葬儀といえるモノはなかった。

一族の墓地にすら入れてもらえず、追いやられるかの様に隅の方に埋葬されるだけだった。

それからは、サグアは母の分まで働かされる形になった。

雑務をこなし、寝る間もおしみ、働いて働いて、働き続け……ついには、倒れた。

『もう使えんか……やはり、どこぞの奴の種を仕組まれたのか使えん奴だ。処分のしどきだな』

その声は、父の声だったと思う。

『それで、どれぐらいになる？』
『魔人族の亜人ですか？勉強させてもらいますかね……。──これぐらいでどうでしょうか？』
『娘のプレゼント代になるのか、まぁいいだろう』
『ありがとうございます。では、これらもこのまま持ち帰っても？』

そう言っては、首から吊り下げたペンダントが零れ落ちる。
それは、母からもらった、最後のプレゼントのモノ……

『かまわん。その様な汚いものなど一緒にな、処分の手間が省ける』
『了解しました。おい、運び出せ！ではでは、今後とも、ごひいきに』
『……もっと高く買い取ってくれるならばな』
『うへぇ、これは手厳しい』

最後に見た父親は、ようやく処分できたとでも言った感じで、こちらを見下ろしていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして、ふたたび思いにふける……
私という存在が、何故に生まれたのだろうか、私という存在は、何故に存在し続けているのだろうか……。
その深い考えに、何度も何度も繰り返すしかなかった……
けれども、その繰り返もとうにつかれた。
思い出すことにつかれた。

考えることにつかれた。

存在することにつかれた。

”もう、終わってもいいよね……ごめんなさい、お母さん……”

そう思っては、目を閉じて意識を手放すかのように眠りについた。

まるで、その魂が眠りにつくように……

そんな折、部屋の外から騒がしい声が流れてくる。

「ちょ、こんなとこに入れるの？マヂで？トイレとかどうすんの？」

「うるせぇ！そこの壺にでもいれとけや、クソガキが!!」

「マヂで？嘘だろ?!衛生観念どうなってんだよ！」

「ゴチャゴチャとうるせえんだよ！だまって入ってろっていってるだろうが！こんのクソガキ！」

小脇に抱えられて連れてこられる存在とのすれ違いによって、その世界が終わる時が近づいていると知らないままに――

＃肆：ふぅ……

よくありそうな”中世風の異世界”あるあるー！

そもそもナーロッパ世界だけじゃなく、中世ヨー〇ッパ世界でもあるある？

人類の歴史の中で、最も考慮しなければならない課題とでもいうのだろうか？

その人類の大いなる課題に、いや、その問題を直視せざる得なかった。

部屋の隅に置かれたクソ壺と寝台が一緒の部屋？牢？になっているという事を！

蓋を開けずともわかります。そういう処理用のスライムとかの代物は存在し無いと。

なにしろ、このクサさは、道中の過程においても荷室でかぐわされておりましたので。

前世の中世欧州だと、中身を路上にポイッとかされてたのが実際にあったとか何とか。

それが本当ならば、衛生観念の”え”の字分も、クソほどに微塵もありゃぁしません。

そりゃぁペストとかパンデミックおこしますわ。

というか、この状況、まさか、この異世界でも同じなのかい？

実家の方の王都じゃそんな事なかったのに……

国が違えば文化も違うというし、まさか、この国では垂れ流す事なんですか？

記憶を掘り返せば、そういえば道中も垂れ流……

つまりは、そういう事なんか？大丈夫なの？この”聖神国”……？
何か、首都みたいなとこ行きたく無くなってきたわ……

そもそも、今世の実家でも”もよおす”場所は屋外になってるぐらいです。
衛生観念的に言えば、ここより幾分よりも十二分すぎるぐらいマシです。
もちろん、秘密基地にも徹底してます。
お手洗いなんて水洗にしたぐらいで、住み込む形になった元・豚鬼さまさん達という技術班任命した人？獣？魔物？……まぁいいや、そういう方達に、色々と驚かれたり構造とか聞かれまくったけど。
あと、排泄物らは肥料としても、発酵を十分しっかりきっちりしてやれば、立派に役にたつんですよ？
今世が農家なのをなめんな。

あ、そうそう、出立前の最後の肥料作りをやってた時、”異世界ファンタジーあるある？が本当にできるのか？”と思い立った。
実験的に堆肥に藁やら骨粉やら魔境産の鉱物をぶっこんで、大きく育てよ～と、”えいやっ！とりゃさ！おいやっさ！”と、ファンタジー力を込めて撹拌してたら、白い塊が湧き出てきたときには”アッ、ヤッベェ”って思いました。

……”まだだ、まだ違うかもしれない！”と、削った粉を木片に着けて燃やしてみた。
ピンクから紫色みたいな感じで――

――察した。

いや、”まだだ、まだわからんぞ！”と、さらに念のためにと、そいつを秘密基地を作るときに取れた黄色い粉と、木炭の粉とを一緒に混ぜ混ぜして、導線作って着火して退避した後、けたたましい爆発音と白煙が出た事を確認した時、現実を知った。

”そっかー、この世界でも、黒い粉（ブラック・パウダー）ができるのかー”と。

これは、よくある剣と魔法だけの中世風異世界（ナーロッパ）観を、崩壊させる材料（ネタ）だね！（テヘペロ）と思ったね。

まぁ、妖怪”首おいてけ”世界だと、これはこれでアリだったとは思うし、そもそも、前世の歴史においても、たしか紀元前からあった……はず？

今いる異世界では、そんな世界観じゃないし、どうしたもんかねぇと、考えましたよ。

そして、考えに考えて出した結論といえば”あっても問題なさそうだわ”という事になり申した。

えっ？なんでって？

たとえば、こういうのから発想するとすれば”銃”があると思います。

けれど、そんな道具より、そこらの石を身体強化（ホンキ）でぶん投げた方が、早くてお手軽なのでいりません。

えっ？投擲が下手な人も使えるって？

ぶっちゃけ、似たようなものを木板なりのガイドレールに沿って魔法で石なり射出した方が早いですが、ぶっちゃけ、魔法そのものをぶっぱした方がお手軽で早いです。

弾だって、最悪そこらの石でいいし、何なら、金属の塊という手もあります。

つーか、うちの村の猟師とか討伐班の人ら弓つかわんのよね。

なんせ、獣だと魔法で強化した肉体で、金属製の……投槍？投矢？投杭？を、やり投げ選手の様に投擲しては仕留めるんですよね。

ただ、深淵層とかにいる大型魔蟲とかだと、魔力的な何か？が邪魔してくる。
物理法則すら一切無視してる奴ら（あの体躯で、空中に浮いてたりする不思議理論の塊）は、寸勁とか浸透勁とか、物理的な攻撃は内部に直接に響くのやらないと効果がいまいちというか、どうも表層で物理法則が捻じ曲げられてる？な感じで身体に届くことがない。
けれど、魔法系はすんなり通って”上手に焼けたり”と、よくわからん存在がいっぱいいるのが、あの森。
だから、銃とか作ったとしても、強い（りふじんな）相手にはダメージソースにならない場合があるんじゃないかな。

なお、うちの兄者たちは、その理不尽すら無視する筆頭かもしれない。
深淵部の魔蟲相手に、剣術スキーな上の兄者は、剣にバカほど魔力まとわせて力任せにぶつ切りにする。
下の兄者はライトなセーバー風の魔法剣？（魔力節約？）みたいなので、移動している相手の”節の部分”を的確かつ綺麗に”全部”切断したりで仕留める。
つーかさ、お隣さんや幼馴染の遠足（デート）先に深淵部を選ぶなや。
かっこいいとこ見せつけたかっただけやろ。それ。
確かに、神秘的な泉とか、滝つぼとかあるけどさ！到着したら、そこで普通に遊んでるだけとかどうなんだよ！
心配で見（デバガメ）にいった自分、空気に徹するの辛かったんやぞ？

この二人、一体何なの？
オトン見習えよ、襲い掛かってくる魔蟲を、無駄な動き無く急所ひと突きで仕留めて、平然な顔してるんやぞ？
それに、浸透系の武技教えてくれた師匠のオカンも出来そうだし……
うちの一家、やっぱ脳筋一家だったわ……あるぇ……

とまぁ、そんな脱線したお話は置いておいて、物理的な面にのみ効果が表れる対象でないかぎり、銃や砲などの鉛弾なんてあんま役にたたないかと。

そうそう、黒い粉の爆発音から興味をそそられて集まった輩たちに”そういうの開発しても無駄だよ、無駄”って説明した後に、”ま、代わりに魔力込めた魔石を打ち出す方法があるかも?”とか言ったら、元豚鬼(オーク)くんさん達が”その手があったか!”という顔をして、開発研究室に籠もちゃったけどサ……

いや、その君たち?新たな堆肥開発してくれてるんじゃなかったの?

えっ?副産物だから、利用しないともったいない?

まぁ、そうね……確かにもったいないよね……

なら、黄色い粉もあるし、その粉とクソ産の白い塊を混ぜ混ぜして、火で焙煎するようにして、出てきた煙を集め……あ、これ、もっとヤバイから止めておこう。

・・・

・・

・

うーん、なんだこの……クソから広がる”異世界ファンタジー崩壊論”。

それに、どれだけクソは偉大なのかという、クソ理論全開で話がすすめれるとか、どんだけだよ。

さてはて、目の前に広がっている誘惑の誘いに負けないために、クソ壺の状況から話を飛躍させていったクソ理論はいったん置いておいて……と。

うん、気にはなっていた同居人には声をかけるべきなのだろうとは

思いますが……
　というかね、ちょっとテンションを別の方向で爆発しておかなければならかったわけで。
　なにしろ、青い肌をさらけ出すような、そんなケシカラン服装の女性と同室なんですよ？
　他でテンションを爆上げしして、気を落ち着かせる必要があるわけなんですよ
　まったくもって、けしからん！けしからんぞ!!
　……
　……
　…
　ふぅ……

#伍：ここは、地獄でもなければ

気を落ち着かせては、目の前に広がる現実を見つめます。
その光景は、肌の色がもう青紫っていう奴で、悪魔っ娘的なアレですよ？アレ。
運送中の荷台という狭い空間の中で、女性の方々とはついぞ一緒になる事は無かったですからね！
テンションアゲアゲになるってわけですよ！
確認してみるも、ツノとか翼とかはなさそうだけど……まぁ、それはそれで。
あとは……そうね、自分がお米様だっこからスローイングで放り込まれ、あれほど騒がしかったはずなのに、ピクリとも動いていない模様なのがちょいと気にはなります。

これは、もしかしてもしかすると、あの大作ファンタジーＲＰＧのアレができるかもしれない？
……

＞はなす
「もしもーし、ごめんなさーい、すいませーん、生きてますかー？」
「……」
「”返事がない。ただのしかばねのようだ。”」
「……」
「”ただの”しかばねって何だよ”ただの”って。それぐらい、よくある光景なんかいな？と思っちゃうよね」
「……」
「”やはり返事がない。ただのしかばねのようだ。”」
「……」

反応が全くないから、ついついやってしまった。
まぁ、”しかばね”じゃないのは解っております。
何せ、呼吸はしているっぽく、上半身の見事な双丘がわずかに上下してますし。
双丘……
自分のを見ると、そこにあるのは平原……
イカンイカン、ソコハツッコンダラマケダ……サスガニソレハ……

「……というか、本当に大丈夫なん？こんなとこに放り込まれるなんて、何しでかしたの？」
「……」
「会話する余力もなし？」
「……」
「しかたないなぁ、もぅ、保養になれたサービスよ？サービスゥ」

ということで、余力が無さそうなので病気の治療にはいりまーす。
そういや、かーちゃんたちも病気になる事ほぼなかったな。
そもそも、村の中での治療が”薬飲んで、無理やり肉とか飯を食って、水を大量に飲んで寝る”という、ある意味、理にかなってるとでもいうか、そうでもないともいう方法というか……改めて思うが、やっぱり脳筋一家だわ。
けど、それで大抵治してたのは事実なんだよね。

あとは、肉……は手元にないし、水……は、水桶っぽいのあるけど、さすがに衛生観念（クソつぼといっしょ）がヤバすぎるところのはまずいだろと。
とりあえず、治療するにあたっても最初は清潔にしないとまずいので、結界的な場所をつくります。
治った後に、感染してまた病気なんてなったら、ギャグにもならないですしね。
それでは！と、”ふんぬっ！”と気合を込めて、この一室に結界のよ

うな物を形成し、ついでに浄化清掃もしておきます。
これ、一瞬で解決できるのは便利ですよねー。

あとは、病気を治すモードの”エイムン”だけでも行って……おこなっ……（ハァハァ

「ちょーっと、ピリッとかするかもだけど、我慢してちょーだいね」
「……」
「そう、いまから行うこれは、医療行為なのです。”正当な医療行為”なのです。いいですね？”ＡＭＥＮ（エイメン）!!”」

なんかさ、エイムンとか、エイメンとか、似てるよねーという事での魔力（？）注入による治療開始です。
この光る右手を、左胸の双丘にイン!!

あ、やわらけぇ……
苦節１６年（前世からは数えない）、豊満な双丘の柔らかさを知る。

これは、良いものだ……

なるほど、おっぱ○聖人がおっ○い星人になる訳だ。
これは、さらに揉みほぐ……治療をしても問題ない、はず。
ちゃんと、ファンタジー力（ちから）は注入しておりますので、間違いではありません。
そう、これは医療行為なのですから。ふぅ……
なお、ラヴは売り切れてるので、注入はできませんよ？
紙袋かぶった医者みたいに、男女平等に注入なんぞしてしまったら、刺激的な絶命をするかもしれませんから。

さては……て？
右手に全集中をして柔らかさをたんの……ではなくて、ファンタ

ジー力(ちから)注入すればするほど、この子、際限なく入っていくんですけど……？

なんだこりゃ？

入っていくというよりも、漏れ出て行ってる感じかな？なら、原因は他にありそうかな？と、右手の全集中はそのままに、左手であちこち弄っていくとうっすらと青紫色の紋様が出ているのを発見した。

ただ、位置がね……？

この位置って、あの例の淫らな証の紋ってやつがある場所でしょうか？

にしては、ハートマークというよりもスペード？クラブ？ふむぅ……

注入すればするほど、面白いほどに入っていくし、紋様がくっきりとみえたりするから、ちょっと楽しくも意地になってきたかも。

「へっ、これは我慢比べって奴ですかい……？いいぜっ、その勝負、乗ったらぁ！」

さらに云々かんぬんと注入し続けていってみたのだが、ちょっと気になったが事あった。

なんか、”漏れてる”のと”詰まってる”のとがある感じがする。

というかね、今度は身体全体に紋様でてくるとか、なにこのエロ紋様。

もう、エロエロですよ……「うぅ……はぁ……あぁ…」とか、なめまか……じゃなくて、なまめかしい声すら漏れ聞こえはじめて、さらにエロさが倍増です。

なお、ファンタジー力(ちから)による診断の結果、身体に関しては栄養不足なだけで、病気云々は無さげだった。

って、ん、あれ？

これ、何というか、これらって”後から細工された”感じの詰まり

方してる？
後天性というか、呪術的な……？
あ、この状況ってあれだ。

”やだ、この子、呪われてる”（両手で口をふさいでるアレ

うーん、その呪いでなのか分からないけど、漏れだしやすく・詰まりやすい感じといったところかね。
なーんか癪に障るので、まずはファンタジー力（ちから）を、治療モードから変異モードで穴あき箇所に蓋（パッチあて）をしておく。
ついでに、漏れ出てたあっち側からこっちへ吸い込む様に逆止弁（おいパッチ）もあてておく。

ふっふっふっふ、人を呪わば穴二つやで？（ニチャァ

あとは、この詰まってる感じってのを、この際、一気にぶっぱで吹き飛ばして……は、さすがにやばいか？

「あとは、詰まってるのを解消すれば……いいんだけど、うーん……」

予想するならば、これ、痛みを伴うと思うんですよね。
無理くり掃除するみたいなもんですし。
そうなると、この右手の柔らかさが……柔らか……右手ぇ……
これは、左手でも……あれ？左手は……？

「ひらめいた！」

そう、今現在、左手が空いています。
つまり、右手で詰まりを解消、左手で傷を治療と、ダブルで行えばよいのです。
そして、煩悩も退散できる（かもしれない）という、まさに完璧な

方法である！

「ということで、もう一つ追加するけど……答えは聞かないよ！」

そうして、左手に新たな柔らかさを、なおかつ馬乗りとなっては揉みしだくスタイルとなっては揉みしだ……治療を開始します。

ああ、ここは天国じゃない、かと言って地獄でもない、言うなれば”極楽”はここにあったんだ……

って、ちがうちがう、現実に戻ってこい自分。

ヤル事はヤる。そう、ヤルんだ。

そうして、配管につまったゴミを除去するような感じで一通り綺麗にすることに成功する。

ただ、残念な事に、エロ紋様がきれいさっぱりお亡くなりになったのが……もったいなかったような、そうでもないような

「ほんと、エッロかったもんなぁ……ちょっと勿体なかったかなぁ……ま、とりあえず、オペの終了デス」

と、流れてもいない汗をぬぐいながら、馬乗りになりつつも患者を見下ろしておく。

この豊穣なる双丘に触れることも……もっかい触れとこ。

さすがに、これ以上の、例えば”パフ”るのは駄目だ、駄目だ……

医療行為を越権する……落ち着け、右手に全集中だ、深呼吸だ……

ふぅぅ……

（あ、いいにおいする――……）

それから数秒後には落ち着き、簡易ベッドの上に寝かされる青紫の

お肌がツヤっツヤっした豊満な双丘を持っているガールを眺めみる位置へと移動する。
あとは栄養失調みたいなもんだし、食料的な何かがあればいいけど、何かないかねぇ……と、考え事をするときはと、やはり一休みさんモードだなと座禅を組む。

ポクッポクッポクッ　チーン！

もしかしたら出来るかもシリーズ！

「食料になーれ〝ＡＭＥＮ〟！」

そんなファンタジー力を石壁の１ブロックにぶち当ててみたら、ぽてっと落ちてきたのは、暖かいままのコッペパン。

「……デキチマッタ、自分の才能がオソロシイゼ」

まさかまさかできてしまうのかと驚きはしたが、これでコッペパンを要求されたとしても、すぐに供給できる方法が確立されたな。
そんな、自画自賛しながら、当初は憎き双丘だったが、今では天界レベルな御立派なる癒しを与えてくれた双丘の谷間に、感謝の念を込めながら、香ばしいコッペパンを埋もれさせ……て

「コッペパンが、つぶされる……だと!?」

コッペパンが押しつぶれてしまった。
あぶなかった、あの時、あの中に顔を埋めて〝パフッ〟ろうとしたのを耐えた自分、まさにナイスである。

さて、目の前での、気になった〝ヤル事〟はやりきったので、あとは、どっかの街とかについたらしいですし、お暇するだけである。

「んじゃ、元気でね、っと。こちらは退散しますんで……」

自分の欲望……ではなく、目の保養になったお返しに衣装を綺麗にしておきます。

そして、そろそろオトンやガキんちょから貰ったソードを探しにいかなければと牢を後にします。

えっ？どうやって出たかって？

そら、あれよ、鉄格子を”えいむん！”と音も無くゆるゆるにしては、”えいむん！”と元に戻しておくだけの作業です。

証拠の隠蔽もバッチリ。

さらにサーチ”ファンタジー力（エイムン）”をかけると、だいたいの位置が把握できたので、目的地へと段ボールの中が安心するスネークの様に探す事を開始です。

いやー、昨今の”ファンタジー力（エイムン）”は便利っすネ

＃口…”翼持ち”というのは……

とある部屋。
とある部屋といっても、豪華な装飾といった物が飾られており、所謂は来訪した者を迎えるための応接室と呼ばれる部屋。

「朝早くに、来訪なされたのは、一体、その……どういうお話なのでしょうか？」

対応にあたっている人物は、多少なりとも怯えた口調ではあったが、はっきりとした物腰で口を開けた。

「”どういうお話”ですって？あなた、わかっていて聞いているかしら？それとも、”とぼけている”のかしら？」
「い、いえいえ、滅相もない。”例の件”……ですよね？」
「……わかっているなら、さっさと報告しなさい。こっちも、暇ではないのよ？」
「は、はい、で、では、その……」

目を細めては、相手を威圧してくる女士。
いや、女士の格好をしている男性とでもいうべきであろう。
その存在からの威圧は、対面している男性に対して放たれては萎縮させていた。

「あら、ゴメンナサイ。最近、面白くない話があってね……男爵様に当たっても仕方が無いわね」
「い、いえ、で、では、ご報告を……」

そうして、優雅にカップへと口をつけながら、報告を聞き出してくる。
その内容は、ここ最近における異常ともいえる魔物による被害であ

る。
　そして、その話は、魔の森に関しても含まれていった。
「魔の森の変化は、はっきりとは解ってはおりません。が、溢れている魔物の数からして、何かしらの脅威が、あの中で発生したのは確かかと……思われます」
「へぇ……面白い話ね。それで、調査員を出したんでしょ？」
「それが、その……」
「ハッキリ言いなさい」
「は、はい、情報を収集するためにと、斥候を出す形にもしましたが、深層の調査から帰還した者がおらずに成果が一向に……、その……あがらずにおりまして……」
　眺め診ている書類にも、それらを手配した内容、それに加えて未帰還者の人数が記されており、帰還した者たちでも、浅い部分だけであり、その場所でも普段見かけないといわれる魔物の種類と種別の目撃内容が記載されていた。
「そ、そこで、その……”コマ”を使わせていただいければと」
「あら？私たちの”コマ”を使いたい、と？そうおっしゃるのかしら？」
「い、いえ……言葉のアヤでして、その、協力を、していただければ、と……」
「へぇ…ふーん……」
　向かいに座る男からは、伺い間違いをしたのかという表情であったが、その表情を一瞥して書類の中身を精査しては言葉を発する。
「ま、いいでしょう。検討をしておくように伝えておきましょう」
「あ、ありがとうございます」
　これで、一つ肩の荷が下りたと思い、大きくため息を履く。
　助かったと。
　実は、この女士には逸話がある。
　無能という烙印を押された者は、その後、見かけることが無くなる

と。
　たとえ、地位があろうとも、何もないところ、だ。
「それにしても、ほんと、何もないところね」
「その、いくばくかの手土産を準備しておりまして……」
「あらそう、それは期待してもいいのかしら？」
「そ、それはもちろんです！　何しろ、亜に連なるモノですので」
「へぇ……それは楽しみねぇ……」
「ご希望に添えれるものかと」
「ま、いいわ。ここまでくるのに疲れたから、少し休ませてもらうわね」
「それでは、客間へとご案内を……」
　そう言って立ち上がる女士を、男爵は引き止める。が、
「いいわよ、勝手にいくから、別に問題はないでしょ？」
「は、はい……ご随意に……」
　部屋から出ていく女士を見送り、大きく口から息を吐き出しては、その座っていた椅子へとへたり込む様に沈んでいく。
「いつ来られても不気味な存在だ……〝翼持ち〟というのは……」

＝＝＝

……暗く、静かな、水の中、

沈んでいく
どこまでも、どこまでも沈んで……
ふと、暗かった世界に、小さな光が生まれた。
何？と思った。
その光は、小さな流星となり、周囲の暗闇を照らしては消し去っていく。
　まるで、その暗闇を否定するかのように。
　そして、その流星は少女の身体にも触れた。

左胸から、体中に何かが流れていく、そんなあたたかな感触と暖かな光とともに。

まるで、母親の腕の中に居るかのように、優しく包まれていく感じがした。

生きていてほしいという母の願いを、幸せになってほしいという親の願いを、苦しみという冷たさではなく、希望という温かさで教え解いてくれる。

終わらせてはいけないのだろうか？

けど、生きてていいのだろうか？

そう思い始めるぐらいに、強くも暖かな光が身体を照らし続けていた。

そして、その光に大いなる意思があると感じた。

少女は、その意思に聞きたかった。

いままで、誰にも聞くこともなく、自問自答していたことに……

「わたしは、生きてても……良いのでしょうか？存在してても良いのでしょうか？」

光は、より一層の強さを醸し出した。

が、その意思から得られた回答は、少女の疑問とは違った。

『……答えは』

そういう風な言葉を聞き取ると、さらに温かくも、力強く感じた光が、全身をくまなく突き抜けていく。

苦痛もけだるさも、恐怖もなにもなく、ただただ、温かく、心のぬくもりを与え、これが「答え」だと、そう示される形だと感じた。

そうして、黒の世界から、白の世界へ置き換わった時、すべてが静

かになり、あたりは暖かな光に包まれている空間の中に、自分がのこされた。
その静寂は、記憶を読み返す猶予を与えた。
悲しかった事、苦しかったこと、つらかった事、それらを和らげてくれた母の思い出とともに……そして、母の教えも思い出す。

”暖かい光”……これは、お母さんから聞かされた……

そう思った時、目が覚めた……。

目元に違和感を感じたために、指をあてると涙がこぼれていた様な後だった。

「あれは、夢？けれど、身体が……温かい、特に、胸元・・・・・・？」
今さらに気づいた胸元の違和感に視線をやってみると、そこには一つの焼き立ての様なパンが挟まっていた。
「・・・パン？」
取り出しては、不思議なものだと眺めてみる。
まるで保温の魔法でもかかっているかのように、ふっくらとした状態を維持しては、そこに存在していた。
大丈夫なモノと、直観的に感じてはいたが、理性は危険だとも伝えていたが、香ばしい良い匂いに「グゥ」と正直鳴ったお腹の音に耐えられずに、口にした。

「あ、これ・・・おかあさんが・・・」

それは、生前の母が、みんなには内緒だといって買ってきてくれた、出来立てのパンの味がした。
少女がまだ小さかった頃の思い出。
だけれど、忘れもしない味と、まったく一緒だった。

「おいしい……おいし……い……」

少女の瞳からは、自然と涙がこぼれ落ちていた。

#陸：D・I・O・

こちらラーマ、オタク・コンペ君指示を頼む。
みたいな事をしながら、角あるごとにクリア確認をしつつも目的地へと向かう。
時には、高い天井の角にアル○ック姐さんや、スパイディ的なへばりつくを披露したりもした。
それよりも、結構広いお屋敷なのに人数が少なくない？とは思ったりはしたが……
なにしろ、執事（バトラー）の人や、家事使用人（ハウスキーパー）の人らが、召使（ハウス・サーヴァント）いや家政婦（メイド）に指示を出してるのを見かけたが、少なくとも衛士（ガード）の類が巡回している姿をみかけなかった。
ま、それはいいか。
とりあえず、検知できた場所へはすんなりと、気取られずに到着する事に成功できたからね。
その場所はというと、日の影になっているので薄暗く、あまり手入れのされてない芝生やら、まさに人気が無いとはこの事。
そんな中に存在するのは、物置小屋ともよべるには少し大きく、納屋と呼ぶには少し小さな建物が建っていた。
鍵……もあるわけでもなく、ただ閂があるだけなので、勝手に入り込むことは成功する。
なんか、拍子抜け。
中は、まぁ、うん、埃クサイというか、かび臭いというか、錆びクサイというか、そういう感じの物置小屋だった。
あと、ちょっと薄暗いので、”エイムん!”と、簡易的な明かりをつくって捜索します。
というか、簡単に見つかる。
目的になっていた代物は、樽の中に無雑作に突っ込まれている剣たちの中に紛れる様に存在していた。
他の抜き身の剣の類と一緒に鞘事ぶっこまれていたので、そこそこ傷物になってはいますが……中身は無事かなと、抜いて確認するも無

事であります。

「使われていた形跡はあるけれども、刃こぼれしてないからセーフ……せーふ？」

そうやって、刃こぼれとかが無いかと確認してみたときに、視界にはいってきたのはＲＰＧとかでよくみかける、豪華な宝箱というよりも”古臭いチェストボックス”。

しかもそんなに大きくもないという感じのソレ。

これは、お宝の予感！開けねば（使命感

と、好奇心のままに開けては見た（ファンタジー力（エイムン）サーチで鍵も何もかかってないと確認）。

出てきたのは乾燥藁に包まれるように「錆びた籠手」がポツンと存在してた。

錆てるのか……と、回りの棚などをよくよく見渡すと、錆びたナベに錆びた包丁、あとはクワに、と、まぁ、そういう感じの環境なんですかね。

なんというか、あれか？忘れ去られて錆びてしまったという奴か？

よくみれば、さきほど見つけたバスタードソードが突っ込まれていた樽も、無雑作に突っ込んであった他の剣などもうっすらと錆びが浮いてますね。

ここ、管理ずさんなんか？放置されまくってるのか？

それとも、廃棄処分場？

まぁ？こういう”錆びた籠手”だけならば、ガラクタ物と判断するのは凡人である。

私はＲＰＧには詳しいんだ！こういう箱にわざわざ入っていたという事は理由があるはずなんだ！

わざわざチェストボックスに入れてまで保管?できてるかはおいておいて入っているし、なおかつ、これ左腕側だけで、対となる右腕側は何もないという意味深が深い。

そう、これはきっと磨けば光るモノという事なんだ！

左手の手甲だけであるからに、意味深であることが確定的に明らかなのである！

という事で、さっそく装備します。

なにしろ、心のＮＰＣが”ここで装備していくかい?”と呟いているので、これは装備しなければならない！

なお結果は、この手甲、かなり大きくて子供Ｖｅｒではガッバガバでした。

仕方ないので、肉体変形の術の子供Ｖｅｒを解除し普通サイズで試すも駄目だった。

あまり気は進まないが……バストがバルクならどうだ！とやってみれば、シックリくる大きさでした。

（なお、服も一緒に広がる様にファンタジー力を入れております。弾け飛ばしたくないし）

うーん、こういう”籠手”とか甲冑ものってのには、何かしら惹かれますねぇ……

アジトで作ってる時も、コダワリをもってやってたところあるのでね。

アジトに帰ったら、対となる右腕用も作ろうかな。もちろん、凝りに凝りまくってさ。

そんな事を思いながら、装着したままぶんぶんと振り回して……ふと思った。

ファンタジー力（ちから）でこいつを変形させて先っちょから剣を生やすと

いう、鋼さんの錬金術みたいな物もできるんじゃね？と。
よし、思い立ったが吉日！
手甲を装備した左腕を前に突き出し、右手で手甲をつかむ。
そして、”ていっ！せいっ！えびふりゃぁ!!”と、右手からファンタジー力（ちから）をぶっこんで、こう手甲から剣を生やしてみようと”リキ”を入れてみたら……

って、何?!うぉっ、眩しいいいい!!!

強烈なまぶしい光に苛まれ……”???u??a　i n　n??e　?iD．I．O．”

何だ？今、聞こえたの？
ＤＩＯってだけのは聞き取れたけど、あの”無駄”とか言う？
というか、”錆びた籠手”が異様に光ったと思えば、思え……ば？

あれ？視界が何か狭い。

というか、左手の”錆びた籠手”が”真っ白な籠手”になってるかと思ったら、右手にも”真っ白い籠手”してるし。
そもそも、脚にも、身体にも、何かこうフィットする的な……？
近くにあった、姿見の鏡らしきものから、布をとっぱらって（ひび割れてはいたが）確認してみれば、全身、白色の鎧を着てる騎士風の人がおられた。
右腕を上げる。
左腕を下げる。
うん、自分だった。
なんだこれ？ファンタジー力（ちから）をぶっこんむ時、鎧化までしろとは念じてないんですけど？
けれども、コレはこれで良いんじゃないかな？と、決めポージングします。

それに加えて、ハードポイントに取り付けた、親父様からの剣がこれまた映える、バエル。
これはアレですな。
メタルな変身ヒーロー的というか、正統派フルアーマー風といった姿！
ただね、これ、ちょっと重くね？
筋肉増量してなかったら、動けんのではないか？ってレベルですよ？これ。
こういうのを中世時代の人たちは着ながら活躍してたのかと思えば、そりゃぁ筋肉質な人達になりますわな。
「へぇ……最近の泥棒さんは、派手なのかしら？」
一瞬びっくりして、声のする方へと振り返ると、そこにいたのは……
オカマ？オネエ？
えーっと、こういう方たちは、最近ではどう呼称すればよいのでしょうか？やっぱりオネエですかね？
とりあえず、そういう人が入り口をふさぐ格好で立ちはだかっていた。
「そうそう、初対面でしょうから、まずはご挨拶を。私は十二翼が一人『ガルディ』お見知りおきを。そして、さようなら、泥棒さん」
そう自己紹介が終わったと同時に、世界が爆ぜた。

#ハ・チカラ

昼前時、”さっそく見てみたい”という要望が出されたので、案内する形で屋敷の中を歩く。

急に行動しては振り回されるのは毎度の事ではあるのだが……、そろそろ何かしらの恩恵を得られてもよいのではないかと。

「ほんと、つまらない場所ね……、……そして、つまらない男ね」

「……なにか？」

「男爵、あなたも、そうは思わない？こんな場所、つまらないと」

「思う所はありますが、住めば都ともいいます。女士もしばらくは住んでみては？」

「あら、そう……？遠慮しておくわ。私にはもったいない場所のようだものね」

「そう……ですか、残念です」

どの口が言うか。

そんな心にもない上辺だけの日常的な”くだらない会話”をしては、とある一郭へと至る。

そこは”犯罪者”を収容するとでもいうべき場所。

女士は、鼻をつまみながら、臭い臭い、不潔だとアピールしながらも、

「それで？見せたいものというがあるらし……い……けど」

女士は、くだらないとでも言いたげな言葉を投げだしかけた時に、言葉に詰まった。

いや、一緒に来ていた召使い含め、私自身も”はっきりとオカシイ”と感じるぐらいであった。

「な、何よココ……まるで……」

女士が驚くのも無理はない。

汚れていた筈の牢内が、信じられないぐらいに清潔感に満ち溢れていたからだ。

つい最近、建て直したとでもいっても通じるだろうか？そういう話をしても通じるぐらいに、綺麗になっていたからだ。

いや、綺麗どころか、うっすらと白く明るく……淡く光りを放っている？
「いったい何が……」
「……あら？男爵さまが、ワタシを驚かせようとしたのではないの？」
「え、いえ、私は何も……一体全体これはどういうことだ？私のところには報告が上がっていないぞ?!」
付きしたがっている召使いに訪ねてみるも怯えながらも「何も報告が上がっておりませんでした」という。
その表情をみれば、嘘をついている訳でもなさそうとわかるぐらいに驚いてもいた。
では、こちらに報告があったのは、”あらたに一つ追加された”話が来ただけであり、それ以降の報告が無いという事は、その後に起きたと言える。
「ねえ、そこにいるアナタ、あなたがやったの？」
女士は面白い事だと興味をもったのか、中に収容されている亜人の蛮族へと声をかける。
だが、その亜人の蛮族は何も知らないと。目が覚めたら、こうなっていたという。
「ふーん……なら、その追加され、ここからいなくなった亜人(モノ)が”ネズミ”なんでしょうね」
女士は、何か”楽しいものを見つけた”とでもいうぐらいに、面白がっている表情をしてた。
報告と現場証拠からいえば、消えたそのもう一人が何かしらを行ったという事は容易に想定できる。
ここにいないという事は、館の中を徘徊しているという事でもある。
不味い、繋がりが露呈する様な事がおきれば……
「おい、館内を探せ！蛮野亜人が入り込んでいるんだぞ！今すぐに探しだせ！」
「は、はい！」
召使いの一人を走らせ、館内へと侵入した賊を探せと命じる。

巡回の人員を、魔物襲撃事件に回して少なくしたのが仇となったか……

「申し訳ありません。賊を捉えるべく、私はこの場を離れさせていただきます。こちらの亜人を検分する際は、どうぞお任せいたします」

「あら、そう？アナタは立ち会わないのね？残念ね」

そう言っている女士は、残念そうというよりは、面白そうという表情をして牢の中を覗いていたが、急に天井を見上げたかと思えば、不気味な笑顔をしながらこちらへと向き直る。

「気が変わったわ。ワタシも、ネズミ退治としゃれこんでよろしいでしょうか？」

「……え？えええ女士が手伝っていただけるならば、た、たすかります」

「ええ、ええ、手伝ってあげるわぁ。許可、ありがと。ただ、何か起きるかもしれないけれど、いいわよネ？」

「え、は、まぁ、大事に至らなければ……」

「あらそう、なら、気を付けるわね」

気を付ける気はサラサラないだろう？という言葉を飲み込みながら、この一郭から軽く手を振る形で離れていく女士を見送る。

まるで、行き先が分かっているかの様に……

（計られた？いや、そういう素振りもなかったが……）

いや、それよりもだ。蛮野亜人の賊を探し出すのが先決である。

聖神国に人として認められた領域で好き勝手され、それを回りの、特に中央の聖貴族の耳に”逃げられた”などという噂を入れられる訳にはいかない。

ただでさえ、地方の田舎聖貴族と笑われているというのに……

「これ以上、バカにされる訳にはいかんのだよ！」

魔境の森に隣接しているがために、聖神教からワザワザ指名を受けての、国家計画を進めているのだ……そんな旨い話を横やり入れられるネタを作るわけにはいかん。

「屋敷の中にいるもの全員で手分けして探し出せ。生死は問わん！亜人に好きにさせるな！」

「は、はい！」
一郭からはなれながらも捜索指示を出し始め、執務室へと到着した頃合いに、大きな爆発音と共にガラス窓が吹き飛んできては、書棚へと身体は吹き飛ばされていた。
「な、なんだ？何が起こっている……？」
「ほ、報告します！倉庫棟の一棟が爆破された模様です!!」
「何……？」
――そういえば、あの時、女士が通りすがりに呟いた一言を思い出す。
「力（ちから）を盛大に放てる、いい機会が出来たわぁ」
「まさか、力（ちから）使ったとでもいうのか？」
壊れたガラス窓から見える倉庫の方向からは、再び爆発音と共に、新たな土煙が立ち昇っていた。

#漆・ムーヴ

「あら？これに耐えれるの？へぇ……」

ちょちょちょちょちょーーー！

いきなり何してくれんすか?!オカマオネエ!!

あれか？オカマは強キャラという奴だったと知らしめてくれてるのか!?

いきなりすぎて、焦ったじゃないか!!

まわり見てみろよ！自分の周辺以外が、クレーターの様に削られて消し飛んだぞ?!

というか、本当にビックリだよ!!いきなりすぎて自分も吹っ飛ばされるし！

あと【はじめまして、そして、さようなら】を本当にしてくる存在がいるなんて思わなかったわ！

とっさに”ファンタジー力”神拳のバリア的な領域を作ってガードしちまったじゃないですか！

「あらあら、ワタシの力それほどまでに手を抜きすぎたかしら？それとも、その”鎧”のおかげかしら？」

いえ、違います。

ファンタジー力のせいだと思います。

「まぁ、それは後でいいとして、もう少し試したいので、耐えてみせて頂戴ね？」

そんな言葉と一緒に、ふたたびブッパしてきましたが、今度は衝撃波的な何か？ですか？

うーん、冷静に観察してみれば、その魔力量濃度だと、ファンタジー力シールドの二重には、ほぼ効かないと思いますけど？

オカマオネエが放った風の刃みたいなのは、ファンタジー力シール

ドにふれるとそこだけ消え去った。

ほら、やっぱり効かなかったよ。

それ、魔蟲の巨大カマキリ野郎の方が凶悪ですよ?なにしろ、シールド四重以上じゃないとサックリと斬られるんですよね、あれ。厄介この上ないと思う。

それよりも、周りの被害がさらに酷くなっていますが良いのでしょうか?

吹っ飛ばされた先々もそうですが、最初の小屋だったものが、もう跡形もなくなって、原型すらないんですが。

「へぇ……まだまだいくわよ?どこまで耐えてくれるかしら?」

こんどは、氷に雷に土の刺にと、もう色々と降り注いできます。

いや、この状況はどうしろと?今度は下手に身動きすらできないんですが。

というか、あまりの出来事が怒涛に流れてしまって、ＲＰＧ的に言えば、これは強制イベントという奴だな?と。

なにせ、強キャラなオネエが出てきてるし、なんか戦闘に入ってるし。

ＲＰＧに詳しい自分にとっては、これは強制イベントという奴で間違いないと確信はしたのだが、どう動いたらいいかてんで思いつかない。

そんな間に、オネエは空に向かって何かを打ち上げては、上から下へと腕を振り下ろしては、空からは光の柱みたいなのがきたりとか、何かとんでもなく周りの被害が拡大していってる状況になってきております。

ただ、なんというかファンタジー力を、ついつい四重にしてしまっ

た後だと、まったく影響がおきないってのは、その……ね？頑張って？

というか、ここにきて気づく。

これ、もしかして、自分が悪役ポジの強制敗北イベントなのか？そうなのか？と。

うーん……とりあえずは、相手がおちつくまでは好きにやらせとくかと、手持ち無沙汰を解消すべく、ファンタジー力シールドを八重、十六重、三十二重と、倍々にして時間を持て余しておきます。

新たな倍増ができるかもしれないので、試すだけ試していこうかと。

というか、いつの間にか他の倉庫小屋みたいなのが無くなっており、屋敷の方までよく見えます。

ただ、屋敷の方に被害でていそうで……あれ、窓ガラスが吹き飛んでなくなってない？

まぁ、そんな余裕ムーブかましてながら、ついに新境地となる四千九十六重が完成！

やればできるもんだ。

えーっと、次は八千百九十二か……計算の方がメンドくさくなってきたゾ。

ただ、コツはわかった、厚くするよりも薄くした方がやりやすいんだと。

「ハァハァハァ……どうなってるのよアナタ！いい加減に……潰れな……さい!!」

あ、終わった？小休止？バテテきてそうだし、そろそろ終わりになるのかな？

ようやく気が済んでくれて助かります。

そして、ここは悪役ムーヴで〆るべきか?”それで全力か?大したことないな”みたいな?

とか思ってたら、足元に影ができたので、上を見上げれてみれば上空に黒い球体が浮いていた。

あれか、ブラックホール的なやつかな?と思っていたら、急に小さくしぼんでこちらへと落ちてくる。

あー、重力魔法的なアレかな?

巨大魔蟲のアノマロカリスみたいなのが、他の魔蟲との戦闘の時に、たまーに連続でブッパしてたしてたやつ。

真似れないかと苦労したっけな……

真似してそれ以上にファン○ルよろしくの動作を、苦労して操作してた下の兄者のをだけど。

上の兄者?

闇の真逆で無数すぎる小さな光球を操作して、深淵の湖畔で煌びやかにドレスアップした場所を作って、奥さんつれこんでましたよ?

……連れ込んでましたよ?(大事な事なので二度いう)

「コレで……おしまいよ!!」

直撃……したと思ったら地面に穴が開いた。

”へっ?”

と思うと同時に、そのまま落下する格好になったが、すぐに底に着い……

「きゃぁ!」

その悲鳴に視線を向けると、そこには、どこかで見た覚えのある、エロエロだった悪魔肌風の女の子が部屋の隅で吹き飛ばされるように横たえていた。

あー、ここに着くのか、そっかぁ、ここかあ……

そして、オカマもおりてきた。ただ、結構な汗だくで疲れた姿で。
「はぁ、はぁ……何で、まだ生きてるの？ホント、しぶといわねぇ……」
”……まだ、続けるのか？”
「?!あ、あら？いい声ね、声だけで惚れちゃいそう、やっぱり名前を教えてくれるかしら？」
名前、名前……本名言うのもなんだし、ここは偽名でもいっか？
どうせ悪役ムーヴかますわけだし。ムーヴ台詞は準備したぞ！
けど、名前の方は急に言われて思いつくの無いんだけど、今の姿だって……
”シロキ……シン？”
「そう、シロキ・シンね。残念ね、その顔を見ることが無くて。とても素敵な顔だと思うのだけれど、今度こそ全力で仕留めてあげるわ！」
”あれが全力ではないのか？大したことはなかったが”
「……言ってなさい!!今度こそ、本気の本気よ!!」

そういうと、胸元をはだけてご立派な大胸筋を露にしたと思ったら、内ポケットから何かを取り出してはぶっ刺し、それと同時にオネエの身体がまぶしく輝いたかと思えば、その身体から白い羽根が2対現れた。

その姿をみて思った。

見るからに天使って奴だから、こちらはやっぱり悪役ムーヴしなければならないのか？と

＃捌：Ｅ？ｕ＋１，ｉｏ＊―．

そもそも「本気の本気」とはいったい？

それよりも、やはり、白い羽根が２対もあると、神々しい姿……

のはずなんだけど、上半身がマチョってると”何か違う”という違和感がぬぐえないのは気のせいではないはず。

「どうやら、魔法的なものは、その”鎧”が無効化するらしいわね。なら、今度はこっちでどうかしら？」

いいえ違います。

ファンタジー力のシールドのせいです。

そんな事を言いたくなった瞬間、オカマ・オネエが消えた。

正確に言えば、消えたというか”超スピードで消えたように見せかけられた”という感じの、そんな動きで接近してきたというのが正しい。

正しいんだろうけど……

その放たれる右腕のストレートを、当たり前ともいえる流す動作で軌道をそらして躱せれます。

それに伴って、反撃するチャンスというか、そういうのはあるんですが、ね。

なんというか、そういうスキがありすぎて困惑する。

これ、カーチャンの手抜き指導の時より酷い。

トーチャン日課の身体を温めるだけの素振りの動きにすら達してない。

もっといえば、上の兄者が義姉（あね）上様にデレデレになって、闇雲に剣を振り回してる速度と同等ぐらい？

という、そんな速度です。

なんといえばいいか、身体の動かし方と動き方を理解してない人の

動きとでも言うのかな。
　さらにいえば、あんな大見得を切ったにもかかわず、結果がコレだっとか、正直、困惑するしかないじゃないか。

「なっ?!」

　躱してはオカマ・オネエは驚いている感じだけれど、そういう速度を毎日経験してたら、呆れを通り越してしまって、どう対処したらいいかわからなくもなる。
　というか、何とも言えないなさに

「”これが、本気の本気という奴なのか?”」
「い、言わせておけば……!」

　あ、口にだしてしまった。
　えーっと、煽る気はサラサラなかったんですけれども、やっぱり怒らしてしまったのか、徒手空拳による攻防が繰り返される事になった。
　ただ、正面から受けとめる程でもない内容ばかりで受け流しスルーをしては……

「逃げるんじゃ、ないわよっ!!」
「ひ、ひぃ」

　おっと、後ろに強い衝撃波が行ったらしい、女の子が悲鳴を上げてしもうた。
　一応、あたらない様にはやってたんだけど……相手が何か我武者羅突撃してきてくれたせいである。
　オカマ・オネエが力をコントロール出来きれないのは、まだまだ未熟な証なんだろうかね。

そもそも、こんな元部屋だった所で、むちゃくちゃに接近戦したら、そりゃ危ないよね。
それに、柔らかさを教えてくれたお方には、傷なんてつけさせられないよ。（使命感

「”大丈夫だ。安心して”」

そう伝えては、とりあえずオカマ・オネエを誘導するように移動しておく。

「余裕ぶっているのも、いまのうちよ！」

よし、これで少しは離れたので、これで大丈夫でしょ、たぶん。
うん……挙動が無茶苦茶すぎな相手で、よくわからんけど。

「へぇ……同じ亜人を気に掛ける余裕があるのね？いいわ、その余裕を無くしてあ・げ・る」

オカマ・オネエは、そんな事を言いだして、なんか気？みたいなので、身体の周りを白いオーラの様なモノを纏いだした。

「女士！ここでの戦いは辞めていた・・・だき・・・」

突然、天井の穴から声が聞こえてきたと思えば、オカマオネエの人にらみで、覗き見で声を荒げていた男性は、何も言えなくなっていた。
そりゃぁねぇ、まとっていたオーラが身体の中に引っこんだかと思えば、身体全体が黄金色なマチョになっては光り輝きだしては躍動しはじめてきて、なんというか、異次元のマチョさになっていた。
それに加えて2対の羽根と、パンイチときている。
いや、その、パンイチへの変化はどうかと思いますが……
けれど、これはアレだよね。奥の手って奴。

つまり、この奥の手を受け止めていくのが悪役ムーヴだよね、たぶん。
なら、少しは悪役ムーブをしてみますか。
「”さて、準備は整ったか?”」
「ええ、そうね。お待たせして悪かったわ」
「”そうか、(やわらか感触忘れたくない右手を使いたくないから)私は左手ひとつでいいだろう”」
そう、右手は大切(やわらかさの)な思い出があるので使わない。
この思い出は、しばらく大事にしておきたいので。
「……舐められたものね。じゃぁ、そろそろ消えて頂戴!」
今度も超スピード、今度はカーチャンのまじめな指導レベルで直線的に襲い掛かってきた。
ので、その通過場所に、左手で作った握りこぶしを置いておく。
ほんの刹那よりも短い時間の前、本能だけで動いている魔蟲にすら反応させない時間で。
するとどうでしょうか。
「グベラッ!」
その突き出した拳へと、自ら突っ込んできてくれます。
そして、さらに自分が”意味がわかりません。”と困惑します。
大丈夫なん?この人……
これ、うちのカーチャンが得意でさ、意識はそのままに認識を分散させて対処しないと、速攻でゲンコツが落下してくるレベルな修行の奴なんですけど、本当に大丈夫なのでしょうか。
それに、これぐらいよけて対応しないと、魔蟲のマンティス君の無

気配、無殺気のシザーズハンドくらっちゃうよ？

というか、オカマ・オネエは、その速度が殺せないまま、そのまま奥の方へ転がっていった。

大丈夫かな？あ、起き上がった！意外と頑丈だな！

「う、嘘よ、うそよ！ウソよ、嘘よ!!こんな化け物が、こんな辺鄙な田舎にいるなんて!!!蛮野亜人の癖に!!亜人の癖に!!!!」

結構なお怒りですけど、その口から鼻からこぼれ出ていた血痕をふき取っては、なんか悪態をついていた。

だが、その悪態が急に冷静になっていたのが、何か不気味だった。

「蛮野亜人……？ふひ、フヒヒヒヒヒ、そうか、そうね……献上する必要は無いわよね、緊急事態だし、ワタシが使っちゃってもいいわよね、化け物退治ですものね……フヒヒヒヒヒ」

そう言って、再び消える様に移動したかと思えば、豊満な双丘の女の子の所に現れた。

豊満な双丘の女の子から、オカマ・オネエの腕を生やして。

脈打つ肉塊も見えたけど、すぐにオカマ・オネエの中に吸い込まれるように消えて……

えっ？あれって、心……エッ？

「喜びなさい男爵！あなたは素晴らしい贄を準備してくれたわ！コレ、純血種よ!!やったわ!!大当たりよ!!アーハハハハハハ！」

えっ？はっ？アエッ？

……

投げ捨てるかのように、女の子を捨て去っては、トテモ　ヨロコンデイタ

オカマ・オネエは気分が高揚しているようで、背中の羽根が４対に増えてイタケレド……

モウ、ソンナコトハ、ドウデモイイ　――

”E?u+l，io*|．　?|+[|!!i　i*　*o[|　d　i　Dio”

#二：実家からの手紙

「ウゲッ」
「どうしたの？ベリガル」

それは、冒険者ギルドで渡された、一通の手紙を読み終えた時の言葉だった。

「いや、実家から手紙が来ててさ……見るか？」
「手紙？」

村から一緒に飛び出して、冒険者稼業を一緒に行う相手に手紙を手渡す。

「読んでいいの？」という質問に首肯して促すと、さっそく目を通しては「あららー、ラーマちゃん来ちゃうかぁ」と、笑い声ともいうか、何というか、乾いた声を出すしかなかった。

「あいつが来たら、問題を起こす未来しかみえねぇ」
「ま、まぁ、そうなるかもね」
「そして、あいつの暴走を、俺が止めなきゃならないのかと」
「そうなるわねぇ……」

いままで、あいつの行ってきた「実験」と称する悪戯行為に、幾度ともなく振り回されてきた。

「成功」したものはまだいい、だが、それ以上の「失敗」した数々の尻ぬぐいに何度振り回されてきたのか。

いっときは、畑が水浸しになり、なんでも”イネ”というものを作るとかどうとか言ってたが、結局は土壌がめちゃくちゃになったりした。

それを兄貴と一緒に、土魔法でヒーコラ元に戻していったが、まぁそれはまだマシな方だ。

「なんでまた、出てくんだよ……出てくるなよなぁ……」
「いいじゃない、ラーマちゃん、慕ってくれてカワイイとこあるわよ？」
「あいつがカワイイ？嘘だろ？いつも俺や兄貴を振り回してたのに？」
「そういうあんただって、そういいながらも、ちゃんと面倒見てたじゃない」
「そういうところは……あったかもしれないというか、そうしなきゃいけなかったわけで」
「まぁ、ねぇ……」

過去の事を思い出せは出すほど、実験という名の悪戯が強烈になっていったぐらいである。
だが、テーブルの上にあるポップコーン？というのは、あいつが作り出した大きな成果でもあり、いまでは特産物になっているから、全部が全部、悪い事とも言えなくなったというのもあった。

「はぁ……自分で何とかできるってのにダメと分かったとたん、ほっぽりだして次の事さえしなけりゃなぁ」
「まぁ、ねぇ、ラーマちゃん、何でもそつなくこなしてたからね」
「ソツなく？ちげーよ、あいつ隠してるだけだよ、動きみりゃわかる」
「えっ？」
「どこか制限かけて動いてるからな、あんな初動と次第がまったくかみ合ってない挙動とか、逆に隠すの下手くそすぎでバレッバレだったぞ」

あいつの身体の動きを見ててわかるくらい、”動かし方をわかって動く事も出来るが、あえてそう動かさない”という、ちぐはぐも度が過ぎてデタラメな動きをしやがる。

「そんな風に見えた事ないんだけど？」
「そうか？重心移動とか、足の指の動きとか、それに合わせての魔力の流動ズレとか、挙げだしたらキリがないぐらい、あちこちチグハグだらけで、いつもの実験ってやつなのか？って思ってたぐらいだしな、うちの連中」
「えええ・・・何それ」
「だからさ、制限無くして本気でやったら村一番になれるのも、当たり前なんだよ。っていううか、この王都でも余裕で一番になれるだろうさ」
「へ、へぇ……」
「けど、アイツはそういう腕試しとかは興味ないだろうけどな。自慢先の”アズダフ”の事があってからは、特に興味すら失せてたし」
「……」
本当の末っ子だった”アズダフ”
ラーマの奴は、めちゃくちゃに可愛がっては、色々と面倒を見ていた。

ただ、それは大氾濫とでもいう魔蟲の群れに村が襲われるまでの話。

大氾濫によって現れた魔蟲。
魔獣ならば狩人隊で対応は簡単なのだが、魔蟲に関してはそうはいかなかった。
村の大人が総出となって対応したが、その数に押しとどめる事すらできず、それどころか村に侵入を許して被害が出る事になった。
そんな折、自分の家族も１０歳以上で戦い方を知っている親父とお袋に、俺と兄貴が総員となって出て行ってたが、１０歳未満は未熟と判断されるために戦闘に参加はさせてもらえる事が出来ない。
ラーマもその年齢だったが、４歳にもなっていない”アズダフ”は当然である。
ラーマはアズダフの面倒を任されたことも含め、避難所へ避難させ

た。

だが、それが良くない方向へつながった。

当時の状況を振り返れば、あまりにも多くの魔蟲たちによって、多勢に無勢となっていった。

そして、魔蟲たちは、何故か村の中心にある、避難所を一斉に目指していた。

何をもって、そうなったのかは定かではない。

けれども、後から状況を鑑みれば、実際にそうだった。

そして、襲撃してきた魔蟲の一部は避難所を襲った。

被害者のほとんどが１０歳にもならない子供たちだった。

そして、その中に”アズダフ”もいた。

襲撃されたその数分後、何とか自分と兄貴と共に救出に向かえた時、襲撃してきた魔蟲たちの全てが惨殺されていた。

その惨殺されて山と積まれた死骸たちの中心に、血まみれのラーマが佇んでいた。

末っ子だった存在を抱いて、ただただ佇んでいた。

兄貴と一緒に状況は直ぐにわかったが、どう声を掛ければいいかわからなかった。

そんな中、駆けつけてくれたオフクロだけは、何も言わずに優しく抱きしめていた。

そんな状況を、助かった子供たちは声をそろえて証言していた。

”ラーマ姉ちゃんに助けられた”、”ラーマに助けられた”と。

村の犠牲者の葬儀の中も、その後も、アイツはふさぎ込んでいた。

”助けられなかった”と、”自分が悪いんだ”と。

俺達家族が声を掛けても、それ以上に何も答える事もなく、部屋で

ふさぎ込んでいた。
かと思えば、真夜中になれば、何処かへと消えたりしていた。
そんな日々が続いた時、いきなりアイツはお調子者としてふるまう様になった。
そうして、無茶苦茶な事をしだす事にもなってきた。”何もしなかったのは、もう嫌だ”と言いながら。
ふさぎ込む事も無くなったのは良かったが、完全にとち狂ってヤバイ雰囲気になってきてた。
まぁ、あのまま間違った方向になりそうだった時、村内の祭りの一環として開催される、トーナメント制の武闘会、それに無理やり参加させられていた。

”己惚れるんじゃないよ!このバカ娘が!!”と言われて。

「あれ、そういうので参加だったんだ……それって結構な荒療治じゃない?見てたけどさ……」
「カーチャンのヤリ過ぎは、何時もの事だけどさ」
「マクローリンおばさんの”だったら、アタシを超えていきな!”とか……無理やり参加させられて、って、おばさん、あれ結構ホンキだったの?」
「かなり本気。”闘牙”までやってたし」
「うへぁ……ラーマちゃん、その本気の鬼神(おばさん)を乗り越えちゃったんだ……」

村でも女傑で名の通ってるうちのお袋に、しかもお袋が得意とするステゴロのホンキを、一身に直に受けて、流して、何かの言葉のやり取りをしながら、涙ながらに殴り返して、勝利を勝ち取るとか、ほんと、うちの家系って何でこう肉体系なんだ?
「ま、そのおかげで、折り合いを着けれたのは良かったけどさ……」

それ以降、ちゃんと向き合ってくれるようにもなり、墓参りもきちんとするしで、お調子者になる前より真面目に働くし、よりいっそう”全力でふざけてくる”事にもなったのだが。

何だよ、糞は宝だ！とかで集めたり、白い粉がいいんだ！とかで畑にばらまくし、見つけてきた新しい種！と言っては栽培しては、変な……いや、目の前のポップコーンって奴だっけか。

「そんなアイツがさ、王都で破天荒に暴れまわってみろって。どうなるんだって話だよ」

「えーっと、面倒事がおきるかな？」

「絶対おきる。そして、首輪代わりの監視として、あいつの兄である俺が指名されるって……」

「……じゃぁ、どうすんの？まさか、拠点を変え「それだ！」」

そうだ、まさにそれだ！

拠点を変えてしまえば、顔を合わすこともなくなって厄介事がこちらに回ってこない！

「今から拠点を変えても、まだ間に合う！あいつの事だから、何かしらの実験とか称して道草くって王都にくるには、かなり時間がかかるハズだ！」

「けどさ、拠点を変えるっていったってどこに？」

「ちょうど、この依頼どうかと見繕ってたやつだが、この際、これに便乗しちまおう」

テーブルの上におかれてあったのは、聖神国への護衛任務という物。

「貧乏くじを引かされたくないから出てきた分けだし、とっとと王都から離れようぜ？」

「えー、育ったラーマちゃんと会いたかったなぁ」

「俺は嫌だね。絶対、全力でイタズラしてくるに決まってる」
「えー、それぐらい多めにみなよ、”剣神”ベリガルさまは器が小さいのかな？」
「小さくて結構。それにおれは賢者だ！魔法使いだ！剣なんか持つきねぇ！」

#玖：天の裁き

マダ　間ニアウ――――
間に合う　間に合わせル――――
もウ、目の前で、大切なモノは無くサない、二度と無くさないと、そう誓っタ――……
そのために、今まで色々と試し続けたのダカラ！
あの柔らかさを教えてくれた、極楽なる存在を……無くしてたまるか！

たまるもんカ!!

「ん？なぁに？そんなに震えて、アタシが素晴らしいと感じでもしたのかしら？」

オカマ・オネエが何か言ってるが、そんなコトはどうでもいい。
対応する方が優先順位が上なのは、救うこと。
それには、時間との勝負！

音を置き去りにする移動をしては、状況を確認を開始する。

「って、どこいったの？」

この世界で色々と試してわかった事は、”２１グラムの重さ”が完全に消失しないうちに対処すれば間に合う事。
それは、前世での俗説だったモノだが、この世界では確実にある。
そして、それは時間とともに徐々に失われていくモノでもあるともわかった。
そのお陰かしらないが、蘇生処置は1分以内というが、このファンタジー世界ではそれすらも覆していた。
だが、それでも老衰などダメな内容もあったが……概ねは、それで

間違いないと分かった。

まずは状況確認！

心臓部が無くなって、胸椎がブちぎれて……こんなの即死だろうが！

くそがっ！初動から遅れてる！

「あら？そんなところにいたの？って、ゴミに何してるのかし……ら？」

急げ急げ急げ、ファンタジー力よ、出力最大！うなれ！この右手!!

修復しつつも再構築!!

再構成する必要があるのは心臓……それは、掃除してたから状況は把握済み!!

あとは、心臓の再構成のベース材……材料……材料!!

彼女の首から崩れ落ちてぶら下がったネックレスが視界に入る。

実験の結果、こういう宝石（ジュエル）の類を触媒に代替品が出来る事は確証済み！

すまんが、コレ使わせてもらう！返事は聞かない!!

ネックレスから、宝石（ジュエル）だけをファンタジー力で抜き出して再構築。

純度を極限にまで高めて……

なんだこの宝石（ジュエル）？

こいつも、ファンタジー力を吸い込みやがる!!

他で触ってた事のある宝石（ジュエル）とは違う？

っーか、んな事ぁどうでもいい！間に合わん！ファンタジー力！出力2倍だ！急げ!!

「なっ、傷が……消えて……」

あとは、血液が……血が足りない……って、代替なんてここにネーぞ！
ワインとかからの物質変異での浄化輸血みたいな事も……
どうする？どうする？どうする？
他に血……血……あ

自分ノ　を　ツカエバ　良イジャナイカ――

右腕一本でいいカ？
わからん！
わからないが、もっテけ！
左手で右腕をブッパし、落ちた右腕の傷口から血液を使えばいい！
拒絶反応無しになるように、浄化に変化もわすれずに、さらにファンタジー力を倍だ！

「はぁ？自傷？ワタシに勝てないと思って何をやってるのかしら？だからゴミはゴミな……の……」

よし！
最終チェック！内臓損傷は修復完了！外傷もなし！
宝石が胸に刻まれる格好にはなったけれど、心臓の代替だからこれもよし！
強制血液循環開始！心拍数も正常!!
肌の色も……青紫色なのはかわらんが、循環も確認！
意識確認、軽く頬をたたいて反応を見ると、わずかに反応が返ってくる。

あとは、”２１グラムの重さ”が、完全に消え去っていなければ、引き摺られる事もないはず……

「ん……」

よし、生命活動の躍動を確認！呼吸も再開している！

よかった……

本当によかった……

「あ、あ、あなた！何をやったの!!死者の蘇生なんて!!!」

ああ、そういえば、煩い奴ガイタナ……

「そんな事が出来るはずがないでしょ!!あそこまで損壊していたのに……アタシたちの始祖様も、蘇生なんて事は!!」

「”ウルサイ。ダマレ”」

雑音がさらにウルサクナッたので、雑音を消さなければイケ　ナイナ

近くにあった瓦礫を、マント状に変化させて、彼女に被せておく。

ついでにファンタジー力でバリアを”二の十六乗”程度の層でも構築しておけば、今度こそ、何も問題ないだろう。

これで、思いっきりヤッテも、問題ナイな？

「あ、あら？ワタシとやるっていうのかしら？以前のワタシとは、まったく違……ヘブラッ」

「”ダマレと、言ったはずだ……言葉が理解できないのは、獣だけだ”」

あまりにうるさいから”ビンタ”してやったら吹っ飛んでいったが、４対の羽根を広げて押しとどまっていた。

「な、何なの、何なのよアンタ!!死者を蘇生するわ、物質を変化させるわ、進化したワタシにビンタをかましてくるわ……亜人風情が何してくれてるのよ!!」
「〝ウルサイ獣には、シツケがいるものダナ〟」
「なっ、なんですって?!アタシの何処がケモノよ!進化したワタクシの美しさが分からないなんて、やはり亜人は亜人なのよ!消え去りなさい!!」
「〝そうカ……〟」

光速で殴りにくるオカマ・オネエ。
〝だが、こんな狭い場所じゃ危ナイだろ?〟と考え、向かってきたオカマ・オネエに膝蹴りを当てて天井を突き破らせる。

「ナ〝ッ?」

勢いよく空へと吹っ飛んでいくオカマ・オネエとは対称的に、天井が崩れ落ちてきたが、ファンタジー力で一緒に上へと吹き飛ばして、オカマ・オネエにぶちあててていく。

そうすると、かなり開けた場所が出来上がった。
周りがどうなろうと、もう知った事じゃない。

アレハ、排除スベキ存在ダ――

「〝あそこじゃ、狭いからナ。今度は真面目に付き合ってヤル〟」

一緒に上空へと飛び上がるが、それを制止してくるしてくるかの様にオカマ・オネエが殴りかかってくる。
だが、そんな遅い攻撃に当たるわけもなく、左手で軌道をズラシた後、即座に空いた脇腹へ左正拳突きを続けざまにいれると、それでもオネエ・オカマはふっとばされながらも、再び押しとどまる。

今度は、先ほどとは異なって蹴り技も混ぜては来ていたが、遅すぎるが為に左手だけで受け流しては背後に回っては、左肘鉄を頸椎部へと叩き入れる。
そんな対処と対応を、左手一本だけで対応していく。
こんな相手に、”遊んでいたから彼女が傷ついた”と思うと、自分が情けなくも腹が立って仕方がなくなる。

何やってんだ自分、と……

そういう心境にもかかわらず、オカマ・オネエの攻撃は続いていた。
だが、攻防とでもいうか、カウンターで仕留める程の威力で攻撃を入れているのだが、それでも相手が沈まない。
手ごたえがあるのに、結果が伴っていないというチグハグな事ばかりが起きている。
まるで、一撃一撃で生じている怪我が、即座に治っているというのが正しいのだろうか？
ただ、それでも動きが稚拙すぎなのは変わらないのだが。
だが、その攻撃のしばらくして止んだ。
こちらから一定の距離に離れて、息を整えている様だった。

「そ、そんなバカな……事があって、たまるもんですか……進化し、四対になっているっていうこのワタシが……そんなバカなことが……」
「”……まともにやる気ハあるのカ？そんな稚拙な動きデ”」
「な、何ですって?!そもそも、当たれば、あんたなんて消し飛ばせれるのよ!!」
「”そうか、当たればいいのカ？”」
「そ、そうよ!!」
「”なら、次は受けよウ。それで気が済むならナ”」
「!?　ば、バカにして!!亜人の癖に!!!なら、受けてみなさいよ!!」

オカマ・オネエは、何かしらを唱え始める。

呪文だとは思うが、聞き取ってもみても”何を言っているのかが分からない”文面というのだろうか。
ただ、その紋言が長くなれば長くなっていくと、周囲の大気が震えだしている感覚があるのを感じる。
「絶対に、絶対に逃がさないわよ……”天の裁き（ディ・プリシ・オーラ）!!”」
オカマ・オネエがそう叫ぶと、一面が白い世界にかわった。

#ホ：【喋るな】

女士と白い鎧を着た亜人の戦闘によって被害が拡大すると判断し、周囲へ被害対応と避難を指示はしておいた。
だが、このままでは、さらに被害が大きくなると思っては、女士に一言をと思い立ち向かったが……

結果は、あの姿を見せられたら、否が応でもわからせられた。

存在その物が違うと。
あれは、こちらが何を伝えたとしても、”暴力”という名の力で全てを覆してくる存在であると。
周囲の状況から察すれば、あの亜人が消え去らない限り、この戦闘は終わる気配は無いだろう……

「純血種よ!!男爵!!アナタは最高の仕事をしてくれたわ!!」

その場を去る間際、敷地内にあいた穴の底から、いきなり女士の言葉が響く。
だが、周囲の状況を察すれば、その場を離れるのは凡人の動作だといえただろうが、それは仕方がない事だ。
とにもかくにも命が優先と考えるのは、生きているモノのサガかもしれない。
敷地の被害がどうなろうとも、戦闘が終わった頃合いを見て戻ってくればいい。
屋敷や設備は、また、やり直せれる……と、見切りをつけて。

女士に見切りをつけては、召使い共々に這う這うの体で、街を見下ろせる位置にある丘の上の領主敷地から、小川を越えてはここまでくれば……とへたり込んで振り返った矢先、白柱が先ほどまでいた敷地を覆いつくしていった。

「た、助かった……逃げていなければ、今頃、あの中に巻き込まれて……」

助かった。
そう安堵したのだが、そのつかの間、その白い柱が徐々にこちらにも広がってきた。
「に、逃げろ！このままでは、ここも巻き込まれるぞ!!」
「は、はい!!」
その白柱が徐々に広がりは、逃げようとした自分たちを、その白い光の中へと……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「こ、これでどうかしら？」
肩で息を切らしながら、穢れの象徴である亜人に神力その物をぶつける術式を発動した。
魔法や魔術を無効にする鎧を着ていようが、神力を使う術には一切関係がない。

”森羅万象の法”

その法の理(コトワリ)を司る内容にそって使用するのが神術と言われるものと、その下位である法術が存在する。
そして、その神術や法術の中には”罰を裁く”法がある。
いま、目の前で行った術式も、その法術ではなく神力による”裁きを下す”術の一つ。
この世界の何れも、その”裁き”を覆される事はない。

いかにあの鎧が”古代の宝具（アーティファクト）”であろうともだ。

「これを使うのは、大変なのよね。あら、2対も損耗しちゃったじゃないの、もう」

背後にあった、4対の翼が欠け2対へと減っていた。

それほどまでに、この”裁きの法”は――

”それで、何がしたかったのダ？”

「!?」

どこからともなく声が聞こえる。

声の主を探すも、周りには何も見えないし、何もいない。

「ど、どこにいるのよ！出てきなさい!!卑怯にも隠れてるなんて!!」

”卑怯？眼前に、居続けているだろう？”

「何を……言って……」

言われて意識した時”ソレ”が存在していた事を認識した。

その背には七色の光輪を携えていた。

その左腕には、淡く白い透明な薄い光輪の盾を近くに浮かせていた。

そして、先ほどまで無かったはずの右腕が元に戻ってもいた。

そして、どうしてこの存在が眼前に居続けていたのに、認識ができていない、と？

こんな存在そのモノが、馬鹿げているにも程があるぐらいの存在感があるものを？
それよりも〝天の裁き〟を受け付けもしていない……そんな法を無視する事があるのか?!
いや、違う、コイツは〝何か〟をしたはずである！そうでなければ……そうでなければ……

「や、やはり、受けなかったのね？出なければ……」
「〝受けてはいた。が、何も起きなカった様ダぞ〟」
「そ、そんな、嘘よ……あれは、神の力、神の裁き、誰もがその神の名の元に裁かれる奇跡なの……よ」

そう、誰もが神の裁きには逆らえない。
裁きに逆らえるとしたら、神そのモノか、神に異議を唱えることができる救世の導き……

「う、うそよ……ウソヨウソヨウソよ！救世は我らが行っている！亜人がそうだとかいうの？冗談じゃないわよ!!今までの亜人だって……亜人だって……」

そういえば、亜人に対して、天の裁きを使う事はなかったと、そこまでの相手でもなかった……
ただ、反逆するだけの、下種な存在であり〝森羅万象の法〟の力を行使するのも烏滸がましいと。

「〝キサマは、不要なモノだ。〟」
「違う！ワタシは！十二翼の一つ！選ばれた民を人を助ける救世の存在よ!!」
「〝いいや、不要な存在だ。このワタシが、そう決めタ〟」
「そ、そんなの！横暴じゃないの!!」
「〝【喋るな】〟」

「うぐっ!?」

強制的に、口が開けない、言葉を発せない。
まずい、このままではまずいと、脳内の警鐘が強くなり始める。
これは、ワタシ一人の問題ではなくなった。
このことを、十二翼に伝えなければならない。
だけれども、身体が、いう事を効かない。
恐怖の為に身動きが出来ないというソレとは違う、畏れ多くて動けないという干渉にかられる。

(動きなさい、動きなさいワタシ!!このままでは、とてもまずい事になるわ!!)

「”剣は得意ではないのだが”」

目の前の亜人は、腰から剣を抜き出す。
その剣も、白く神々しく輝いていた……

(殺される?!このワタシが?!なぜ!!なぜ殺されなければならない?!ふざけないで、ふざけないで、フザケナイデ!!)
(ワタシが、どれほどまでに神の為に捧げたと?始祖様からのお告げとともに、どれほど貢献してきてい……「”亡せろ”」)

その剣がゆっくりとひと薙ぎされると、真っ白な何かに包まれ、意識が遠のいて……
ワタシが……
消える?嘘でしょ?

そんな、そんなのって、そん……

#拾：ｏｈ，ｊｅｓｕｓ…

ラーマです。
かなり頭にきてたのは自覚していたので、このまま怒りに任せて殴ると、ちょっとだけ……いや、かなり爆散しかけてしまう気がしたので、それならばと斬る事を選択したのですが、斬れませんでした。
”斬れなかった”というより、その、正確にいいますと、剣の具合を確かめるべく、あと予防線を張るために”得意ではない”ことを主張し、その後は台詞の練習も兼ねて”失せろ”と軽く振った程度だった。それだけなのに……

その切っ先から極大な真っ白いビーム球みたいなのが飛び出していった。

その極大な光球に、パンイチマッチョオカマオネエエンジェルが包まれたと思ったら、しばらくすると霧散するかのように何も無くなっていた。

何これ、怖い。

自分、いろんな感情を含めて「は？」という言葉が出てしまい、一気に怒りゲージがゼロになるぐらいにドン引きした。
そして”これ、元はオトンからもらった、普通のバスタード・ソード（改）だよな？”と、マジマジと見直したぐらいである。

あと、何気に『パンイチ・マッチョ・オカマ・オネエ・エンジェル』という、なんだこのパワーワードの組合せ羅列の集合体みたいなの、言葉で表すと変態度が上限を突破してるな、この表現。

ま、まぁ？とりあえずは、うっとうしい胸囲は……元い、脅威は去っ

たので、彼女の近くに行ってみると、ちゃんとバリアは効果あったようで、彼女の周辺だけは無傷状態で残っており、無事でホッと一息です。

というかですかね、近づいた此方に気づいた途端、丁寧な土下座をされまして……

……なんで？

＊　＊　＊

彼女を連れ出す格好で場所を変えました。

とかく、先ほどの殺風景な場所となったところで、頑なに土下座やめないんですよ？この子。

なので、無理やり、お姫様抱っこをしては連れ出す格好で移動です。

そして、ちょうど良さげ場所がないかなと、跳躍しながら移動したんですが、森の中に湖畔らしきところがあったので、とりあえずそこで話をすることにしました。

「”先に謝る。大丈夫と言った矢先に、君に傷を負わせた事に”」

「と、とんでもございません。卑小（ひしょう）な身を御救い頂いた事、誠に……」

「”そういうのは、いいから。そんな話し方はしなくていい”」

「そ、それは、不敬に値するかと思いますが」

「”大丈夫……という言葉は信用ないか。けれど、普通に話してくれる方がうれしいかな”」

何か畏まりすぎて、儀礼的な扱いという風にしか見えなくなるので、

「私は、何故、生かされたのでしょうか？」

「”ん？”」

「私は、誰からも必要とされずに生きてきました。なれば、生きている価値は無かったと……」

そうして、語りだされた身の上話。

なんでも、肌が違うからと腹違いから種違いへと、母親と扱いが酷くなって入ったが、それでも一緒に幸せだったといえる生活を送っていたと。

そして、正妻とその実子の息子たちからも、蔑まれた生活を送っていったと。

ただ、母親が無くなり、さらに忙しさが高まってきたときに、病に倒れてそのまま売られたと。

父親だった人の最後の言葉が、娘のプレゼント代にもならないとか何とか……

そうして売られた先で静かに寝かされていたが、しばらくしたら再び無理やり連れ出され、後はあの牢の様な場所にいたと。

……アレ？

第三者だからか、なんか変だなと。

「”すまないが、その、女の子は他にもおられたのかな？”」

「新たに誕生したとも聞きませんでしたが……」

意識が混濁した時の記憶だから、ぼんやりとしてたのだろうか。

本人は気づいていない。まるで、それが当たり前かの様にも。

蘇生する際に、死という事象に引き摺られると、記憶の混濁やら欠落やら、そういう記憶に関してが色々と起きるのは野盗犯罪者集団で確認済み。

確認がてらに、今こうして語っている分から、だいぶ回復は出来たかもしれないが……混濁してる雰囲気があるな……いや、これは……呪いの影響が残ってもいそう？

うーん……確かめてみるか。

「〝いいか、よく思い出しなさい。君が、一番忘れたくなかった事を〟」
「忘れたくなかった事……？」
「〝そう、静かに目を閉じて……思い出してごらん〟」
目を閉じた事を確認してから、ファンタジー力を緩やかに込めて、彼女の頭へと載せておく。
あ、今気づいたけど、サラサラ髪なんだ……いい匂いもしそうだな

＃　＃　＃　＃

『〝サグア〟には、必ず光が当たるわ。そう、温かい光を差し伸べてくれる方が必ず現れるから。『・・・・・・・・』
お母さんの言葉、優しく抱きしめてくれて……
いまでも思い出しては・・・…あれ？何か忘れている事がある様な？
灰色の砂嵐が流れる。
『〝サグア〟には、必ず光が当たるわ。そう、温かい光を差し伸べてくれる方が必ず現れるから。『ああ、・・・だ・』』
再び、思い出が流れる。
先ほどとは違う場所と、違う構図で。
そこには、誰かがいた。
再び、灰色の砂嵐が……白い暖かな光にかき消される。
『〝サグア〟には、必ず光が当たるわ。そう、温かい光を差し伸べてくれる方が必ず現れるから。『ああ、そうだな』』

そこには、もう一人の人物が映し出されていた。
母に抱かれる私の頭を、その優しい目をして撫でてくれている。
今の様に……

思い出した。思い出した。
何で今まで忘れていたのだろうか、何で今まで……

「お父さん……？」

そうだ、正妻に娘なんて誰も居ない。
娘はお母さんの子である私だけ。
なのに、娘のプレゼント代と言っていた……
正妻様や、お爺様たちも含めて、その場に立ち会ってもいた。

『魔人族の亜人ですか？勉強させてもらいますかね……。保護・越境と兼ねてこれぐらいでどうでしょうか？』
『これが娘のプレゼント代になるのか、まぁいいだろう』

思い出した。
こぼれ落ちたペンダントを見て、悲しい顔をしていたことを、
ワタシを抱きかかえてつぶやいた言葉を、”すまない、守り切れなかった”と、
小さく声をかけてきてくれて、”幸せになってくれ”と願ったことを……

なんで、忘れたのか
なんで、忘れていたのか……

けれど、はっきりと、今は思い出せる。
父がこっそりと会いに来ては遊んでくれた日々を、

母といっしょに誕生日を、こっそり祝ってくれた日々を、
『『愛している』』と、言ってくれていた日を、
このネックレスも……

「あ、ネックレス……」
「”あ、ああ、すまない。君の無くした臓器の代わりとして、そこに使わせてもらった”」
と、空いている手の指先で、胸元をトントンと叩いた。
はっきりと見える位置にはないが、手で触れてもわかるものが、そこに埋め込まれていた。
意識をそこに集中すると、暖かくも優しい火照りを感じる事が出来る。

何もかも思い出す。
死の間際の事も、思い出もすべて……

自分の命が一度は無くなってしまったが、両親の想いによって生命を紡いだと理解した。
悲しい事の記憶だけで”死”を迎える事でもなく、ちゃんと愛されていた事を伝えて”生”を与えてくれた御方がおられると知った。

私は、この御方に救われた。
神の御業によって。

そう、神の御業――
幼いころ、伝承の一節と同じ事が起きて――

御降臨なされていたのだと知った

私の”生”は、この御方の為に存在する事だったと
優しき、暖かな光を頂戴される、この御方に出会う為だったと

その御方の名は、確か――……

＃　＃　＃　＃

「すべて、すべてを思い出せました。ありがとうございます」

「”そ、そうか。良かった”」

記憶の欠落や混濁によって、精神に異常をきたす事があるから、対処療法とでもいう感じでファンタジー力で何とかならないかなと対応をしていたんだが……

何とかなったようである。

さすがファンタジー力、万能すぎです。さすファン力。長いな、”さすファ”か？

ただ、途中、うめき声と共に泣き出して焦ったけれど、その後、急に落ち着いたりして、傍から見てたら、情緒不安定この上ないなと。

そして、手をどけてみると、今度は目を開けてこちらを見上げる視線には、なにかこう力強い意思を感じる格好のち、こんどは急に跪つかれて告げられた。

「これから私”サグア・アシャ”は、御身を”我が主”として御遣いさせて頂きとう御座います」

「”わっつ?”」

「『シロキ・シン様』」

その発言を聞いた時、やっちゃった感に苛(さいな)まされた。

「”……おう、じゃいざす”」

#?：錯雑し始め

天井に設置されている多様な色のガラス窓を、日の光が通過しては広い空間を明るくする。
照らし出される空間の中は、荘厳な建造形式をとっているとでもいえるほどで、何も知らないモノであっても、神聖さに打ちひしがれると場所でもあった。
ただ、そこにありそうなもの、それは生命を持つものが一切存在しなかった。
植物であり、昆虫であり、ヒト
その存在しない違和感という名の空気が、その場を支配してるともいえたが……
その様な場所に、人の姿を模した何かが数点、光に照らし出される一つの台座を中心とし、十二の方角にて座する様に存在していた。

それは、神像ともいえる彫像であった。

いくつもの彫像が座してはいたが、そのうちの一つ。
それは他にもいくつも存在する像とは違い、その輝きが失われているといえるぐらいに、薄暗く佇んでもいた。

『先遣が堕ちた』

座する一つの神像から、声ともいえぬ声で言葉が紡がれる。

『トビラが開いたか』
『あるいは……』
『とうに開いていた』
『またもや、漏れ出たモノの暴走というのも』
『どれにしろ、由々しき事態ではある』

それらの彫像が、まるで意思があるかの様に語りだしたかと思えば、数か所が語り始める。
ただ、それは”半数も満たない”といえる数ではあったが。

『魔の報、”真”という事でよいか？』
『ああ』
『それでよかだろう』
『異議は無い』
『……』
『異論か？』
『少し、詳しく調べる必要があるのでは？』
その場の空気が、少し変わる。
わずかに、陰の気として。
『何故だ？』
『氾濫に暴走、ヒトの世に混乱が起きているのは真』
『だが……我々の中、確実に観たモノがいるのか』
『……』
『……』
『少なくとも、我は観てはおらんな』
『もうよいではないか、”堕ちた”事は事実』
『そうだな』
『それが、まさに証左と言える』
『しかし！』
『なれば、遣いを出せばよかろう？出せれるのであるならば』
『……っ！』
『やめておけ、ここでの話は意味が無かろう』
『……はい』
『……だな』
少し変わった空気が凪いでは、いつもの空気へと戻ってもいった。
『さて、話を元に戻すが、こたびの件で、”真”とするがよいか』
『”真”で』

『”真”であろう』
『判断に足りえないとは思うが……』
『ああ、それはその通りだ』
『何をいうか、”真”以外なにを選ぶというのか』
『”偽”であったと？では、なぜ先遣は堕ちた？ヒトの世でだ』
『そ、それは……』
『まぁ、よい。”真”であろうとなかろうと”今代”の選定を進める』
『おお』
『ようやくか』
『永らえた世に、ふたたび光が灯るか』
場の空気が、再び変わる。
だが、今度は先ほどとは違い、陽の様な雰囲気で。
『そも、選定されようとも、問題は無かろう？』
『確かに”偽”であろうと、影響はあるまい』
『それは、確かにそうなのでしょうが……』
『なれば、選定を進める方向でも問題は無いといえる』
『”今代”については、また、別として慎重に事を運ぶべきかと』
『先遣が堕ちた今だからこそ、選定するべきでは？』
『その通りだ』
『確かに、”脅”なる存在を”除”するべきだ』
『その通りだな』
『異議はない』
『私は……』
『私もだ』
『我もだ』
『進めるべきだな』
『問題はあるまい？』

いくつもの神像から賛同の異が告げられる。
その中にあった、反対の異をかき消し、錯雑（さくざつ）し始めようとしていた時、

『今代の選定を進める。以上だ』
その一言により、終わりを告げる。
そして、ほとんどの神像から賛同ととれる言葉が紡がれながら、ひとつづつ光を失っていった――

――――――――

――――――――

――――――――

いくばくかの静寂が流れ、ふたたび数体だけが淡く光を発する。

『去ったか……』
『はい』
『私は、やはり”偽”であると……』
『そうだな。やはりこの事変、先遣にしろ決にしろ、何事にも性急に事が成されすぎている』
『しかし、世に狂いが生じているのは確かかと』
『それも、間違いではない……ふむ……』

ふたたび静寂が訪れる。
次の言葉を待つ為に……

『”個”の判断ではあるが……再調査をする』
『ですが、”全”の決は成されました』
『なに、”個”で動く分は問題なかろう』
『あくまでも”個”ですか』
『そうだ』
『……動けぬのが、忸怩（じくじ）だ』
『そう気に病むな。それにできる事を行えば良いのだからな』

『なれば、私めも』
『……
その様な話が、光に照らし出されていた台座が、いつのまにか陰りの位置になる時まで続き、そして数少ない光る像も消えていった。